季刊

直江の津



◉特集◉

人が支える「頸城」の大地

巻頭エッセイ◉わたしの直江津

マニュキア

知の楽しみ

たのしい おいしい 考古学

フリースペース

今町が生んだ力士 越ノ海勇蔵

◉直江津経済文化研究会◉

夏号

2003

6,7,8月

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

直江の津

第十号　夏号
二〇〇三―六・七・八

特　集　人が支える頸城の大地　4
巻頭エッセイ　マニュキア　佐藤光子　3
知の楽しみ　たのしいおいしい考古学　岡村道雄　12
フリースペース　今町が生んだ力士越ノ海勇蔵　村山和夫　18
シリーズ　屋台まち　24
読書びと　神谷美恵子　若きこころの旅　太田愛人著　17
見る目　木造一鎮倚像　28
東西海陸　22
投稿　直江津花街からの文　小池　昇　30
読者から・バックナンバー　31

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治十一年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。



庭掃きをする子坊主

マニュキア

佐藤光子

「まあ、綺麗な色ね」

運転をしている彼女の指に、真珠色の美しいマニキュアが施されているのを認めると、助手席に座っていた私は、思わず声をあげた。彼女の頬は、心なしか赤く染まった。

マニキュアを塗る時は、私には鉛筆を削る時に似た、ものを思う時間である。加えて、むらなく綺麗に塗るために、時間と気持ちに余裕が無いと駄目なのだ。私は、無心の様でいて、その充実した時間が好きなのだが、忙しさが先にたってなかなか塗れないでいる。

彼女とは高校時代演劇部が一緒で今も仲が良い。電話で「明後日金沢へ行く」と告げた。

「あ、文化の日。——ね、途中下車して。一緒に行ってもらいたい所があるの」と言う。

結局三時間程の途中下車となった。彼女は高田の出身だが、今は直江津に住んでいる。

「今日は、吉越さんの学校の文化祭なのよ」前を見たまま、彼女はさりげなく言った。

吉越君と私は中学の同級生だった。彼女は吉越君とはスキーの同好会で知り合い、結婚を約束した時期もあったと聞いていた。どういう経緯でそれが実らなかったのか、その詳細は聞いていない。けれど、誤解が重なって、互いに未練を残しての別れだったらしい。

文化祭なら、外部からの出入りも可能なので、それに紛れて、吉越君が校長している学校へ行ってみたいというのだ。

私はふと、彼女がマニキュアに費やした時間の中身を思いやった。

子供の頃の吉越君は、勉強もスポーツもよく出来て、私にとっても憧れの存在だったから、40年後の今、どんな校長になっているか一目見たいという好奇心が、私にも湧いた。

折から、保護者会でも終わったのか、体育館から保護者達が出てきた。その人波の後に、長身の吉越君の姿があった。後ろ手でゆっくり歩き、すっかり校長の貫禄だった。

小さく手を振った私に、一瞬怪訝な顔をしたが、「おっ」という表情をした。

「菅野さん」彼女を旧姓で言い、引き合わせる様に前へ押した。しかし、吉越君の表情には、特別なものは無い。黙って前を通り過ぎていった吉越君に、彼女は顔をこわばらせた。

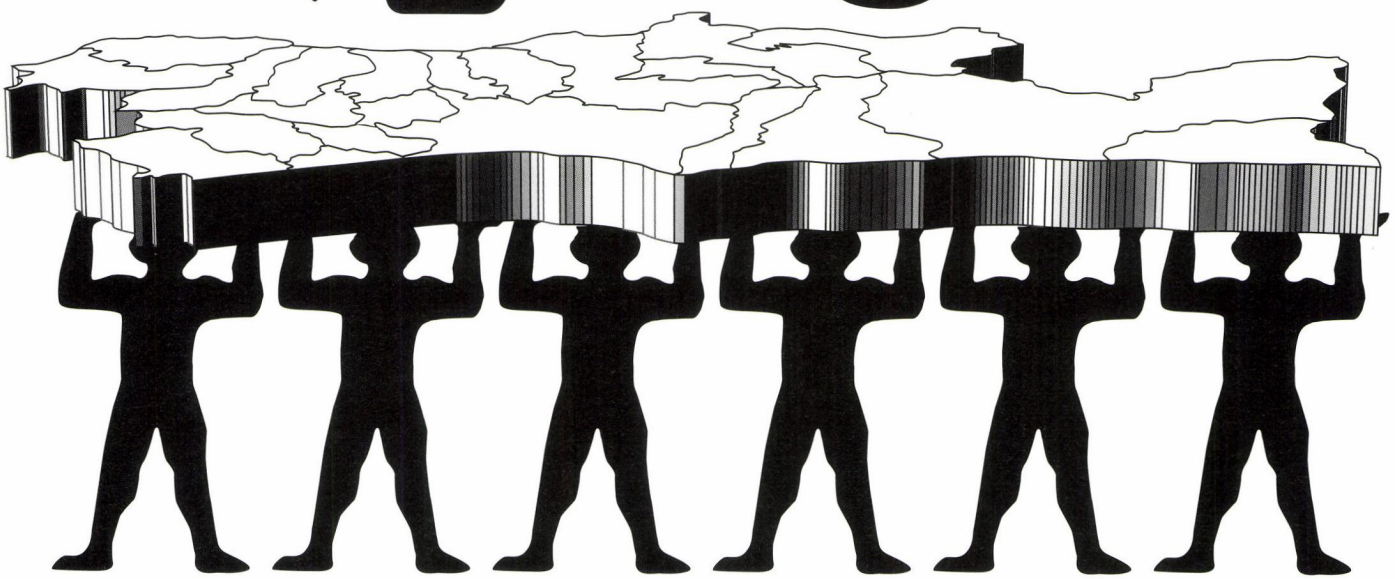
「吉越君って、昔もシャイだったわ。きっと彼の気持ちの中に、未だ過去に拘っているものがあるのよ。ほら、あの素っ気なさは、かえって未だあなたのこと思っている証拠よ」

彼女がマニキュアを落とす時の心情を思いやって、私は精一杯慰めた。

（東京都在住　エッセイスト）

特集

人が支える「頸城」の大地

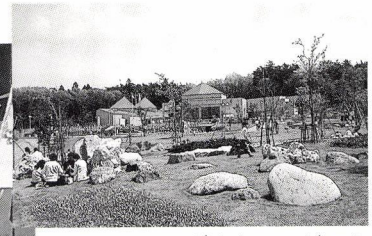


本特集は、合併の是非、その組み合わせや合併推進特例法そのものについて論議しようというものではありません。しかし、地方分権の推進により、その権限が地方に委譲されるなか、高齢化・少子社会による経済事情や社会情勢の変化に対応していくためには、この「平成の大合併」は、避けて通るわけにはいかない問題といえましょう。

ここでは、「合併問題」を大上段に振りかざすのではなく、日々の暮らしのなかから、まちの花や木などの自然、祭りや人々が集う行事、観光、名産などを列挙し、解説などをあえて省くことによって、むしろ、その間隙から見えてくるであろう、わがまちの〈かたち〉、わがまちの〈旗印〉とは、それを支える〈人の力〉とは何かを読み取っていただきたいと思います。

現在、進行中の合併協議がどのような形になり、どのような結果をもたらそうとも、ここに旗を立てた二十二の市町村は、自然・環境・歴史・文化・経済、すべてを共有し、何らかの影響を与え合ってきた、〈久比岐（くびき）〉という冠を戴いている地域であることには違いありません。


おててこ舞い


フォッサマグナミュージアム

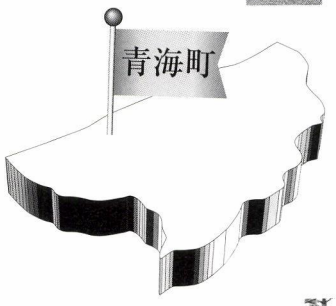


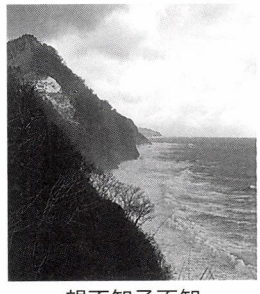
面　　積　466.62 ㎢
人　　口　31,757 人
まちの木　うめ
まちの花　ささゆり

祭り　糸魚川おまんた祭り（8 月上旬）・糸魚川けんか祭り（国文化財／4 月 10 日）・日光寺けんか祭り（4 月 18 日）・根知山寺延年の舞（おててこ舞・国文化財／8 月 31 ～ 9 月 1 日）

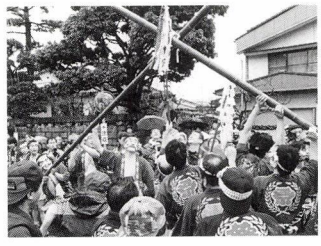
まちのアピール　ヒスイ峡・高浪の池・不動滝・月不見の池・海谷渓谷・フォッサマグナミュージアム・長者ヶ原考古館・ヒスイ王国館・海水浴場（糸魚川・大和川）・スキー場（シーサイドバレー・焼山温泉）・温泉（蓮華・笹倉・焼山・雨飾・姫川・白馬・フォッサマグナ糸魚川・ひすいの湯）・名産（地酒・ヒスイ細工など）






親不知子不知

竹のからかい



面　　積　129.28 ㎢
人　　口　10,019 人
まちの木　すぎ

祭り　おうみ祭り（7 月）・海のウエストン祭（5 月／白鳥山の山開きに合わせて開催）・青海の竹のからかい（小正月行事・国文化財／1 月 15 日）

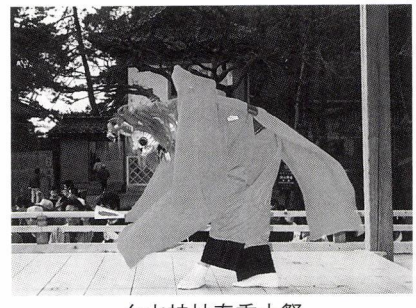
まちのアピール　親不知子不知（親不知ピアパーク）・青海川の硬玉産地（橋立ヒスイ峡は国天然記念物）・須沢臨海公園（パターゴルフ広場他）・山姥の里上路（あげろ）（謡曲「山姥」の舞台）・きらら青海（自然歴史博物館）・ラベンダービーチ・グリーンパーク親知不知・まるたん坊（親不知交流センター）・名産（ヒスイ細工）

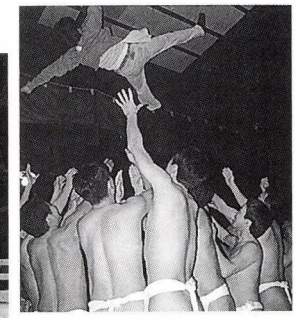


面　　積　150.49 ㎢
人　　口　10,858 人
まちの木　いちょう
まちの花　しゃくなげ

祭り　のう奴奈川まつり（8 月）・白山神社春季大祭（国文化財／4 月 24 日）・藤崎観音堂裸胴上げ（1 月 17 日）

まちのアピール　白山神社本殿（社叢はヒメハルゼミ北限で国天然記念物・海上信仰資料）・棚口温泉権現荘・シャルマン火打スキー場・海水浴場（能生・百川・藤崎）・名産（べニズワイカニ・越の丸なす）

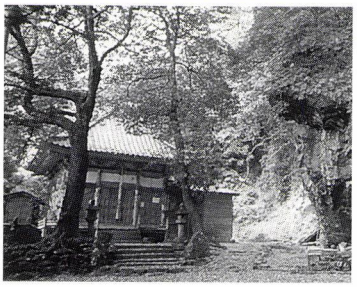

白山神社春季大祭


藤崎観音堂裸胴上げ

うみてらす名立



越後三十三観音岩谷堂



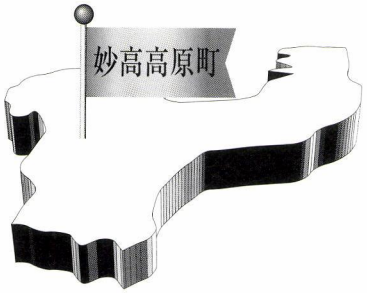


面　　積　65.94 ㎢
人　　口　3,366 人
まちの木　さくら
まちの花　すいせん

祭り　名立まつり（8月2日前夜祭～3日本祭り）・祇園祭（延喜式内社江野神社の祭り／7月7日～13日）

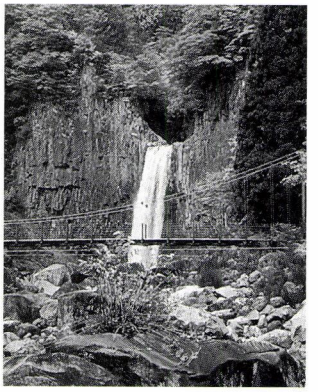
まちのアピール　うみてらす名立（ミネラル水の温泉とプール・ショッピング・宿泊施設）・シーサイドパーク名立（風車が目印）・花立温泉ろばた館・名立海水浴場・岩屋堂観音堂（泰澄開祖・越後三十三観音第一番霊場）・雁田神社（子授け・安産の神様）・名立川サケのつかみどり（11月）・名産（げんぎょ・お灸）

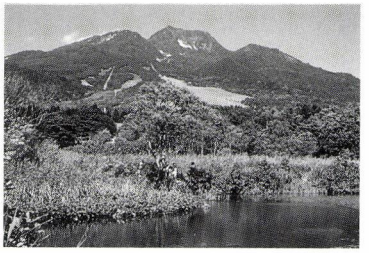




面　　積　128.57 ㎢
人　　口　6,485 人
まちの木　しらかば
まちの花　れんげつつじ
まちの鳥　かっこう

日本の滝百選「苗名滝」



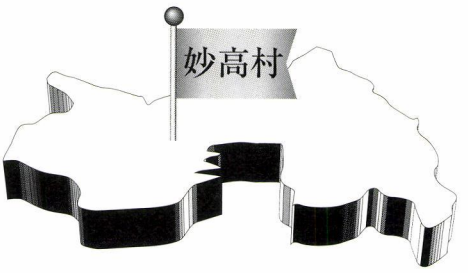


日本百名山「妙高山」

祭り　艸原祭大かやば焼き（5月第2土曜）・赤倉温泉ちゃわちゃわ祭り（8月3～5日）・関川関所祭り（9月20日）

まちのアピール　妙高高原温泉郷（赤倉・池の平・新赤倉・杉野沢・妙高）・スキー場（赤倉温泉・池の平・妙高杉野原）笹ヶ峰高原・妙高山（日本百名山）・火打山（日本百名山）・苗名滝（日本の滝百選）・岡倉天心六角堂・関川関所「道の歴史館」・いもり池（水芭蕉の群生）・名産（地ビール・笹寿司）





面　　積　140.78 ㎢
人　　口　5,029 人
まちの木　ななかまど
まちの花　れんげつつじ
まちの鳥　いわつばめ

関山神社火祭



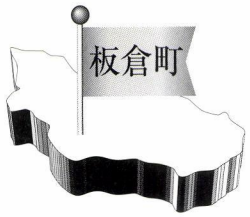


遊歩百選「斑尾高原」

祭り　妙高ふるさとまつり（11月第1日曜）・関山神社火祭り（7月17～18日）

まちのアピール　関山神社・斑尾高原沼の原湿原（原生花園）・村民の森「遊森の郷」温泉（燕、関温泉・樽本温泉）・スキー場（燕温泉・関温泉・休暇村妙高・スキーパーク妙高・妙高パインバレー・斑尾高原）・特産品（天狗の隠し酒・山もち・十全なす漬）

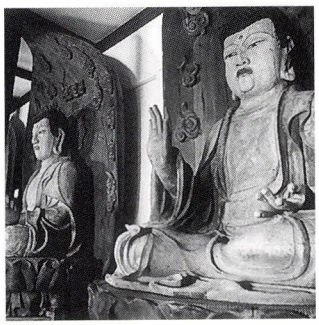
板倉町



面　　積　66.51 ㎢
人　　口　7,702 人
まちの木　けやき
まちの花　やまつつじ
まちの鳥　ほおじろ



光ケ原高原

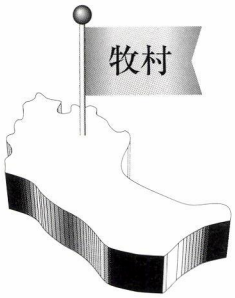


山寺薬師

祭り　板倉ふれあいまつり（文化・産業・福祉の向上のため各種団体、サークルなどの発表を総合的に展開／11 月）・関田古代詞（江戸時代に生まれたといわれ夜を徹して踊る／8 月 18 日）

まちのアピール　光ケ原高原・箕冠城跡・山寺薬師（県文化財）・ゑしんの里安らぎ荘（二つの泉質の異なる飯田と大峰の温泉）・恵信尼寿塔（親鸞聖人の妻の出身地）

牧村



面　　積　61.35 ㎢
人　　口　2,921 人
まちの木　やまゆり
まちの花　けやき



大根いっぺごとまつり

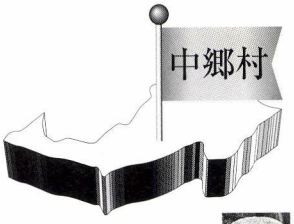


ふるさと村

祭り　秋まつり（11 月 3 日）・雪まつり（2 月第 2 日曜）・切光神楽・上牧集落盆踊り（上牧古代詞／8 月 15 日）・高尾集落盆踊り（古代詞ヨイヤナ／8 月 16 日）

まちのアピール　宮口古墳（国指定）・ふるさと村自然と憩いの森・湯の里深山荘・弘法清水・高尾集落琴昆沙神社の大ケヤキ「老いの木」・棚田の風景・名産（「ぴりっ子」（香辛料）・雪太郎大根）

中郷村





面　　積　43.55 ㎢
人　　口　5,234 人
まちの木　えんじゅ
まちの花　さくら
まちの鳥　うぐいす

祭り　なかごう夏まつり（8 月 3 日）

まちのアピール　松ケ峰温泉・妙高サンシャインランド・妙高サンシャインゴルフ場・松ケ峰カントリー倶楽部・オープス中郷・縄文公園・名産（辛味子など）

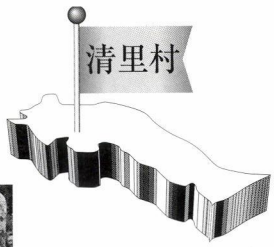


妙高サンシャインランド



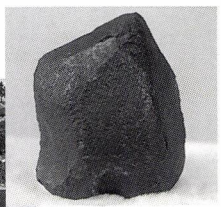
籠峰遺跡出土の土偶

清里村

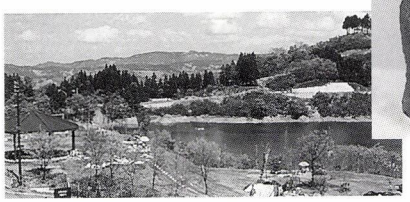


面　　積　37.54 ㎢
人　　口　3,289 人
まちの木　すぎ
まちの花　うめ
まちの鳥　うぐいす





櫛池隕石



坊ケ池

祭り　サマーカーニバル in 清里（8 月 2 日）・菅原神社祭礼（8 月 18 ～ 19 日）・水嶋磯部神社例祭（梨平古代詞／8 月 14 日）

まちのアピール　星のふるさと館（650 ｍｍの天体望遠鏡や大正 9 年に落下した巨大隕石を展示）・坊ケ池湖畔公園・山荘京ケ岳・櫛池大杉（県文化財）・黒保遺跡（日本で初めて炉跡を発見）菅原古墳（県文化財）・名産（清里漬物など）

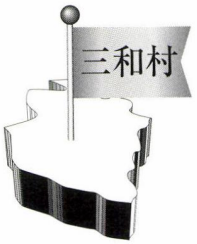
祭り　風巻神社例祭（7月20日）・五十君神社祭・春駒・井ノ口古代詞

まちのアピール　川浦代官所跡・水科古墳（国文化財）・石造仏頭（県文化財）・大間城跡・金銅虚空蔵菩薩懸仏（五十君神社ご神体、県文化財）・月見塚・薬師いこいの森・ホテル米本陣・米と酒の謎蔵・ひなた荘温泉・名産（地酒・つのナス・葡萄・栗・コシヒカリ麺）



風巻神社の神輿

三和村



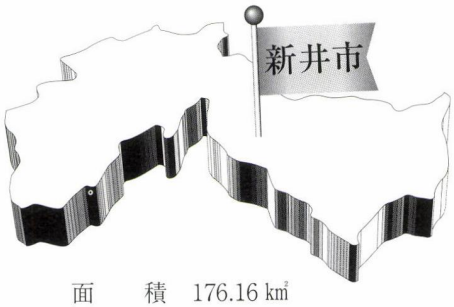
面　　積　39.36 ㎢
人　　口　6,306 人
まちの木　すぎ
まちの花　すいせん





春 駒

新井市

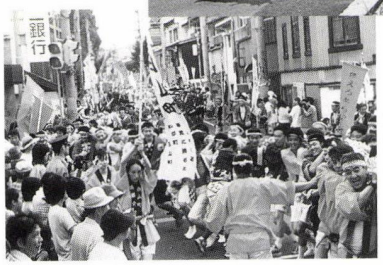




面　　積　176.16 ㎢
人　　口　27,971 人
まちの木　けやき
まちの花　みやまつつじ
まちの鳥　うぐいす



越後あらい景虎物語

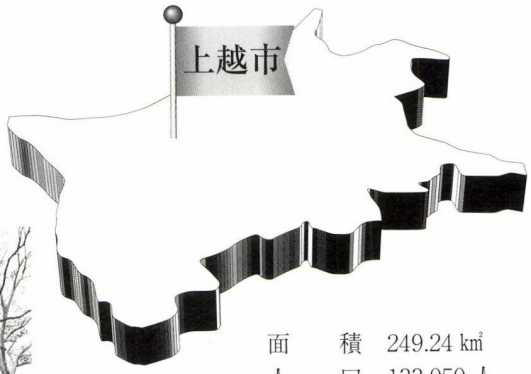


あらいまつり大綱かつぎ

祭り　あらいまつり（市中を練り歩く「大綱かつぎ」は日本一／8月）・越後あらい景虎物語（山城・秋・雪の陣と3回ある）・風まつり（白山神社例大祭／5月1～2日）・おたや（東本願寺新井別院報恩講／11月1～4日）

まちのアピール　高床山森林公園・ARAIマウンテンアンドスノーパーク（4月に「ARAIレジェンドスキーレース」が行われる）・温泉施設（矢代温泉友楽里館・仏ケ峰霊泉深山の里・野趣美の湯長沢茶屋）・ほっとランド（健康温浴施設）・鮫ケ尾城跡・名産（地酒・地ビール・かんずり）

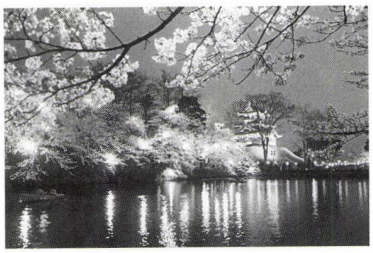
上越市



面　　積　249.24 ㎢
人　　口　133,050 人
まちの木　さくら
まちの花　つばき



五智国分寺三重塔



百万人観桜会

祭り　上越まつり（祇園祭／7月23～29日）・高田城百万人観桜会（4月上旬）・謙信公祭（8月16～17日）・はすまつり（8月上中旬）・レルヒ祭（2月中旬）桑取西横山小正月行事（鳥追い・嫁祝い・おおまら／1月14～15日）・マリンフェスティバルin上越（8月上旬）・城下町高田花ロード（10月上旬）

まちのアピール　歴史遺産（五智国分寺・居多神社・親鸞聖人上陸の地・春日山城跡・高田城三重櫓・浄興寺）谷浜なおえつ海水浴場・金谷山スキー場・くわどり湯ったり村・ヨーデル金谷・前島記念館・日本スキー発祥記念館・小林古径邸・岩の原葡萄園（ワインの父川上善兵衛）





大潟町



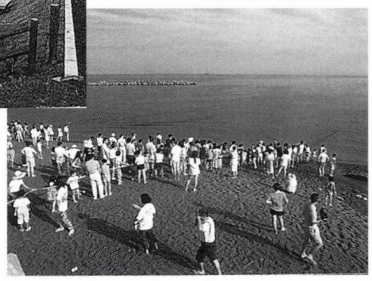
面　　積　16.32 ㎢
人　　口　10,597 人
まちの木　まつ
まちの花　うのはな

祭り　大潟まつりかっぱ伝説（大潟まつりとかっぱ伝説をミックス／6月第1土日）・八社五社（祝い唄・踊り）・米大舟（盆踊り）

まちのアピール　鵜の浜海水浴場・鵜の浜温泉（旅館・民宿15軒）・鵜の浜人魚館（本格クア温泉施設）・大潟キャンプ場・県立大潟水と森公園・名産（地酒・野草酒「汐の香り」いちぢくワイン「人魚伝説」・じゅんさい・いちぢく羊かん）



人魚伝説公園



観光地引き網



柿崎町

面　　積　85.39 ㎢
人　　口　12,112 人
まちの木　まつ
まちの花　はまなす

祭り　柿崎まつり（8月2～3日）・お引き上げ商工祭り（報恩講を引き上げて行う／6月20～22日）

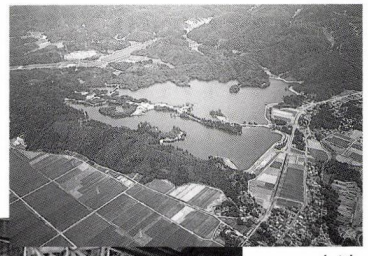
まちのアピール　寺社（浄善寺・妙蓮寺・楞厳寺・密蔵院護摩堂）・自然（米山・大出口泉水）・温泉（上下浜温泉、栃窪温泉）・海水浴場（中央・川面海水浴場）・名産（はまなすジャム、おこめのクッキー「よねやまっ子」）



新潟県名水百選「大口泉水」



密蔵院護摩堂



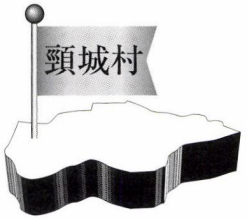
大池



坂口記念館



頸城村



面　　積　38.30 ㎢
人　　口　9,967 人
まちの木　すぎ
まちの花　あやめ

祭り　頸城の祭典（8月第2土日、お盆と重なるときは第1）・白山神社舞楽祭（8月9日）

まちのアピール　大池いこいの森・坂口記念館（酒の博士）・名産（地酒・くびきの押し寿司）

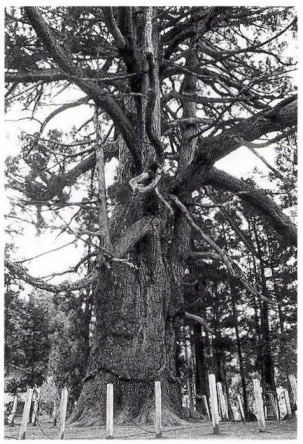


浦川原村

面　　積　50.64 ㎢
人　　口　4,290 人
まちの木　いちょう
まちの花　あじさい



山本葡萄園



虫川の大杉

祭り　若葉祭り（4月下旬）・うらがわらまつり（8月第1日曜日）・山本ぶどう祭（8月最終日曜日）・農業祭（11月3日）・雪上カーニバル（2月第3日曜日）

まちのアピール　伝統芸能（飯室神楽・谷の雅楽）・歴史（顕聖寺・日光寺の薬師如来は眼病にご利益／5月8日・法定寺石仏群・荒沢不動尊）霧ケ岳温泉「ゆあみ」・山本ぶどう園・杢の里（木工・草木染めの製造販売）・名産（地酒・自然芋そば・アリランキムチ・ぶどう）



尾神岳
パラグライダー基地



杜氏の郷

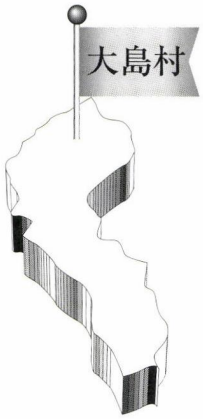
吉川町

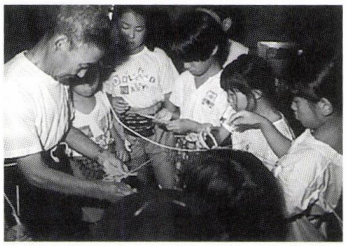
面　　積　76.61 ㎢
人　　口　5,596 人
まちの木　うめ
まちの花　あじさい
まちの鳥　うぐいす



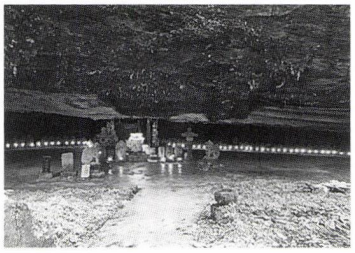
祭り　越後よしかわ酒まつり（10月4～5日）・越後よしかわやったれまつり（8月2日）
まちのアピール　よしかわ杜氏の郷・長峰温泉「ゆったりの郷」・まるたき温泉・体験交流センター・尾神岳スカイスポーツ基地（パラグライダー）・長峰池・顕法寺城跡・仏足石（善徳寺）

大島村





あさひの里　庄屋の家での体験

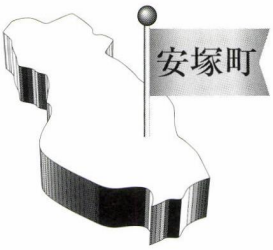


板山不動尊

面　　積　71.64 ㎢
人　　口　2,450 人
まちの木　やまざくら
まちの花　ゆきわりそう

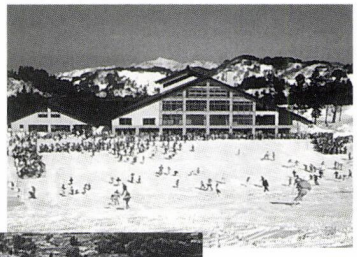
祭り　菖蒲高原山菜まつり（6月1日）・小海の池湖水まつり（6月1日）・仁上ほたるまつり（6月21～7月12日／ほたるコンサート7月5日）・竹平ほたるまつり（6月28日）・おおしま夏まつり（7月26～27日）・村民音楽祭（10月19日）・菖蒲高原そばまつり（10月26日）・農業祭・生涯学習フェスティバル（11月2～3日）・越後・大島雪ホタルロード（2月21日）・秋葉山ちょうちん行列（4月29日）・鳥追い（1月14日）
まちのアピール　文化財（板山不動尊・深沢の大けやき・木喰上人像）・自然（ホタルライン「ほたる見台」・鼻毛の池）・ふるさと体験村「あさひの里」（庄屋の家・かやぶき体験棟・ぶなの森園）・大山温泉「あさひ荘」・青空市場・菖蒲高原（ベルハウス・コテージ村・キャンプ場）・名産（コシヒカリ「おおしま育ち」・地酒「蛍の舞」・アケビつる細工・菖蒲深山そば・日本一のトコロテン）

安塚町

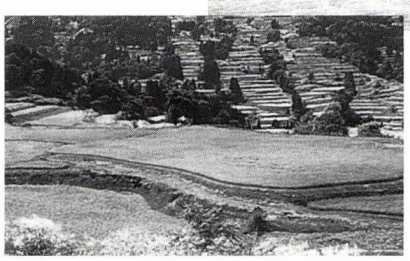




面　　積　70.23 ㎢
人　　口　3,691 人
まちの木　きはだ
まちの花　すいせん



キューピットバレースキー場



上船倉の棚田

祭り　スノーフェスティバル（雪像づくり・キャンドルロード・雪茶屋など／2月下旬）・越後田舎体験（農村と都市の交流／5～10月）・安塚神社春まつり（4月27日）・風間祭（直峰城跡／5月8日）・高沢神楽（伝統芸能）・鳥追い（牧野集落／1月14～5日）
まちのアピール　雪だるま高原（キューピットバレースキー場・雪だるま温泉）・雪だるま物産館・かやぶき美術館・リバーサイドロード・フラワーロード・棚田の景観・史跡と自然（直峰城址・小黒の専敬寺・坊金の大杉・菱ケ岳・不動滝）・特産（コシヒカリ・手打ちそば・笹だんご）

美人林

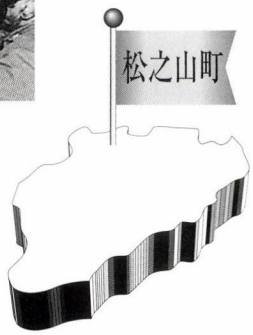






むこ投げ・すみ塗り祭

松之山町

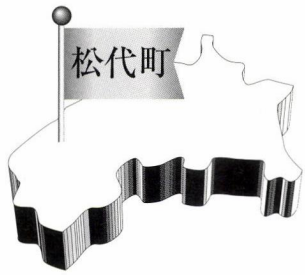


面　　積　86.31 ㎢
人　　口　3,051 人
まちの木　ぶな
まちの花　しらねあおい

祭り　松之山温泉祭（5月第3土曜）・むこ投げ・すみ塗り祭（小正月行事／1月15日）

まちのアピール　美人林（ぶな林）・マリア観音（隠れキリシタン）・大棟山博物館・鏡ケ池（謡曲「松山鏡」）・大厳寺高原・松之山温泉スキー場・温泉センター鷹の湯・名産（しんこもち・野鳥こけし）

松代町



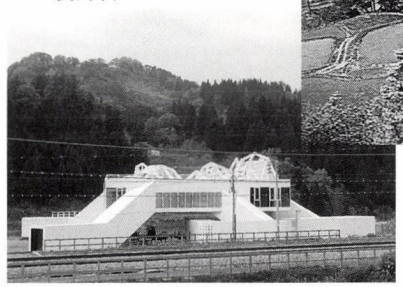


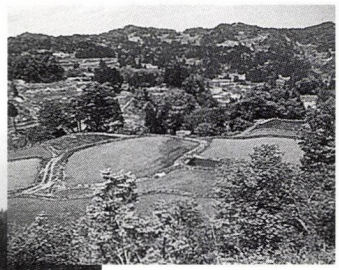
面　　積　90.47 ㎢
人　　口　4,245 人
まちの木　ぶな
まちの花　ゆきつばき
まちの鳥　のじこ
まちの動物　むささび

祭り　越後まつだい冬の陣（3月第2土日）・大地の芸術祭（越後妻有アートトリエンナーレ／3年に1度7～9月開催）・七つ参り（7歳になった男子が松苧神社に参拝する／5月8日・8月18日）・観音祭（7月19~20日）

まちのアピール　松苧神社（国重文）郷土資料館（入母屋ケヤキ造農家）・芝峠温泉レストビレッジ峰・道の駅（ほくほく線まつだい駅）・雪国農耕文化村センター（世界最先端の建築家・アーティスト・地域のコラボレーション）・もぐらずし・もぐらなべ（もぐら＝なら茸）・棚田の風景

雪国農耕文化センター
“農舞台”





棚田の景色

本企画の各市町村のデータは、担当課からアンケートにお答えいただいたものを中心にまとめたものです。また掲載の写真は、提供写真、パンフレット掲載の写真及び編集部において撮影したものです。

繁忙のなか快くご回答をお寄せいただき、深く感謝申し上げます。また、お寄せいただいたデータの多くが、紙面の都合で割愛せざるを得ませんでしたことをお詫びいたします。（編集部）イラスト地図：桐朋 岸田

道路元標について

文中の小さな写真は「道路元標」といい、その歴史は、明治6年（1783）太政官通達まで遡りますが、写真のような石柱になったのは、大正8年（1919）に公布された道路法によって、里程の基準として全国の市町村に設置されることになったためです。このとき、東京の日本橋の中央が「日本国道路元標」として定められました。しかし、昭和28年の新道路法でその機能を失いました。身近な機能として、公務員の出張旅費の算出基準などに使われていたようです。

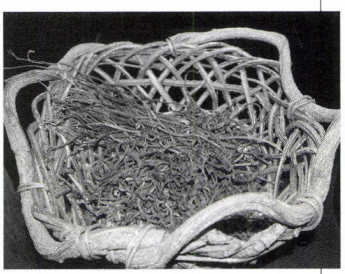
この元標に刻まれている名前は、昭和28年の「合併促進法」による合併で消えた町村名がほとんどです。促進法施行以前には、上越地方に80以上の町村がありました。そのすべてに、このような元標が立っていたかどうかは不明ですが、現在、17町村の元標が確認されているに過ぎません。そのほとんどは、道路の改変などによって廃棄されたようです。なかには、捨てられたものを川原から引き上げて店頭に飾ったり、個人宅の庭に引き取られたものも僅かながらあります。一方、清里村では「櫛池村」を村文化財に指定したり、松代町では「奴奈川村」の元標脇に説明の標柱を立てたりしています。



日本国道路元標



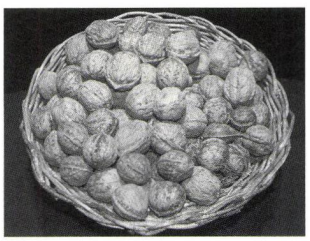
たのしい おいしい 考古学



わらび



どんぐり



くるみ



しいの実

おかむらみちお
岡村道雄

私たちの歴史は遡って行くとずっと大昔につながっていて、私たちが今ここにいるわけですが、遺跡には人が生まれ死んで行った、私たちと無縁じゃない祖先の姿が見えてきます。

＊

上越市の埋蔵文化財センターに入ると、最初に「食べる」というキャッチフレーズで、出土品が展示されています。

三十年ぐらい前から、世界中の国から色々なものが入って来て、日本の食生活を大きく変えました。それは食生活に限らず、日本の文化も大きく激変させました。

そこで、「食べる」というキーワードで、縄文時代以来一万何千年もずっとつながってきた日本人らしい文化の原点を考えていきたいと思います。

たのしい考古学

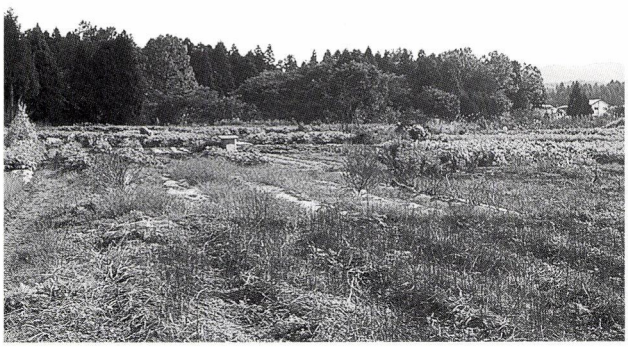
私は寺町二丁目で生れ育ちましたが、小学三年のとき、近くの御殿山に土器や石器が落ちているのを聞きつけて友達と行ったのが、土器探しの始まりです。そのとき拾った土器は、子どもの頃の宝物として今でも持っています。「ああ、昔の人たちが使ったものだな」と思うだけで、面白くてわくわくしたものです。もう一つの思い出は、本町に森成というお医者さんに同級生がいて、遊びにいっては、土器や石器を見せてもらいました。それが今、「森成コレクション」として埋文センターに並んでいます。これは資料として大変貴重なものですが、それを見せてもらったのも考古学に憧れる一つのきっかけになったかなという気がします。



写真は上越市埋文センター



豊かな縄文の暮し（新潟県歴史博物館）



子どものころ通った「茶新田遺跡」

おいしい考古学

私の母親は山菜取りが好きで、正善寺の方へよく連れて行かれ、カタクリ（かたこ）を摘んだりしました。最近は天然記念物に指定されている地域もあって、採っておひたしなどにしたら大変ですが、みずみずしくて歯ざわりがいいものです。私は今、単身赴任で奈良に住んでいますが、奈良の周辺で山菜採りをするかと聞いても、ほとんどそんなことはしないという答えが返ってきます。野蒜や、土手には土筆や蕗のとうもありますが、誰も摘みません。

その奈良には、おいしい食べ物がほんとにありません。お寺や旧跡などがたくさんあって、昔の都なのに食べ物文化が残っていないのが不思議です。

飲み屋に入って「奈良らしい食べ物」と注文したら、「奈良漬」という返事が返ってきました。他にはと聞くと「鹿の刺身」という返事です。奈良公園の鹿は「奈良公園の鹿」という名称の天然記念物ですから、飲み屋の返事は、単なる語呂合せで、「鹿の刺身」は奈良の名物とはなりえません。

奈良の都は七一〇年に造られて、七〇年ぐらいで遷都します。急造の都を造って、全国の貴族や役人が集まるという政治都市として成立しても、再び遷都すると人がいなくなって、とたんに衰退してしまい、そこには固有の食べ物文化が育つ余地がなかったのだと思います。

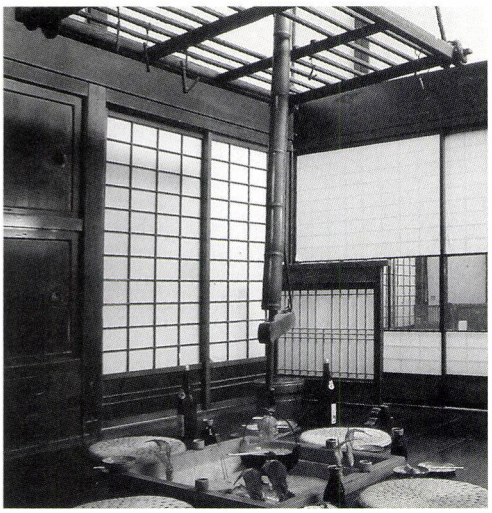
少し前のことですが、大分県の古墳の周りで採ってきたツワブキで、きゃらぶきを作っておいたら、苅谷俊介さんという考古学好きの俳優さんが訪ねて来て「うまい、うまい」といって食べてくれました。このような自然な本当の味のするもの、縄文以来、何千年も前からずっと受け継がれてきた食べ物文化を今の私たちは、急速に忘れ去ろうとしている気がします。そういうことを私の話の中から少し気付いていただけらと思います。

縄文の衣

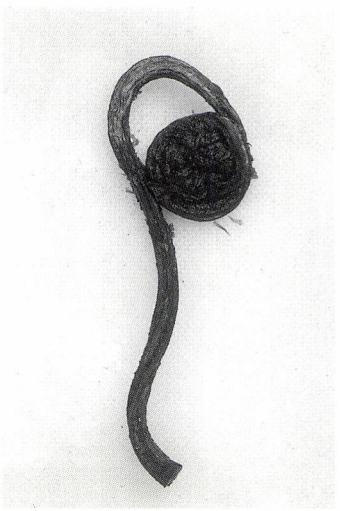
十日町や秋山郷などで今も伝えられている「編布」の断片が、縄文時代の遺跡から出ています。そのころから「あんぎん」と呼んでいたかどうかは分かりませんが、織るのではなく糸を絡ませて編みます。今のところ完全な出土例はありませんが、お墓の遺体に断片が付いていたり、中国のモンゴル自治区にも四、五千年前のものが残っています。鹿の皮でも服を作っていたと思いますが、「編布」で衣服を仕立てたというのは間違いありません。

縄文の住

縄文時代の住居は「藁葺き」といわれていましたが、復元方法の間違いで、今は「土葺き」が多かったと考えられています。例えば「風土記」や「日本書紀」に出てくる〈土蜘蛛（つちぐも）〉、土蜘蛛のように、土葺きの竪穴住居に潜



今も火棚のある囲炉裏



富山県桜町遺跡出土の「コゴミ」

り込んで住んでいるという意味のようです。

竪穴住居は、まず穴を掘って柱を立てて屋根を葺き、掘りあげた周囲の土を被せていきます。煙が出ていれば、炭焼き釜のようにも見えます。冬は暖かくていいのですが、夏は湿気が強くて暑いため、夏用に高床（たかゆか）の掘立柱の小屋を作って住んでいたらしいということも分かってきています。

囲炉裏の上の火棚に置いた生ものや、釣ってきた魚を「弁慶」（弁慶の立ち往生から連想）という藁つとに刺しておくと、自然に燻されて燻製になります。日本にも立派に燻製の流れがあったということです。

ハムやベーコンなどの燻製品は、ヨーロッパから入ってきたものだと思われがちですが、日本の旧石器時代にも、穴を深く掘って苔を燻して鹿肉を燻製にしたらしい証拠が二、三出てきています。しかし、はっきりするのは縄文時代になってからで、トンネル状の炉穴を作り、煙突の先のほうに肉だとか色々な物をぶらさげておくと、煙に燻されて燻製ができます。こういう穴が九州から関東まであり、燻製を作ったのでしょう。

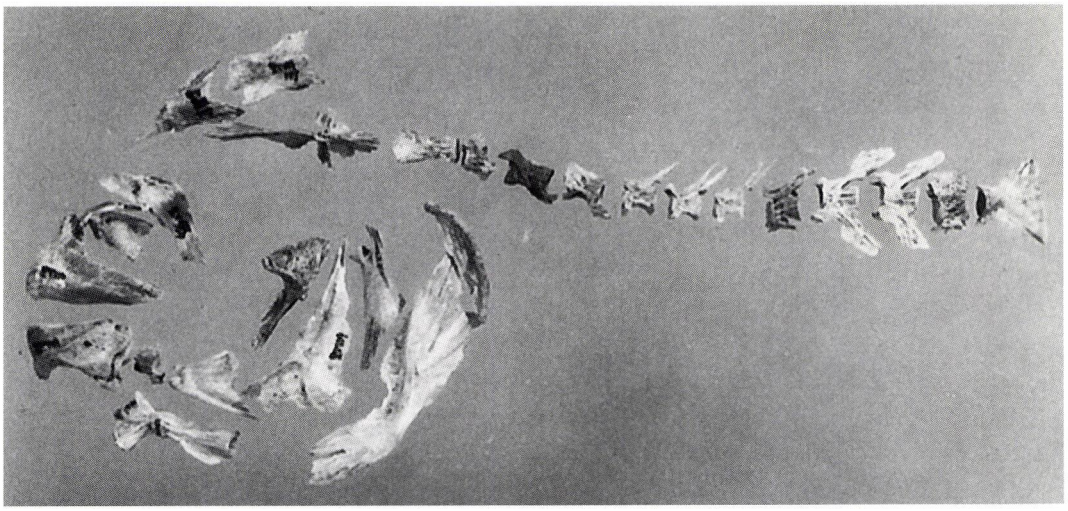
縄文の食

縄文人はどのようにして塩を作ったのでしょうか？　塩がなくても十分生きられるのですが、米を食べるようになってから、生理的な食塩が保てないので、より塩分が必要になってくるのです。縄文時代の後半に、なま物の塩蔵保存や山辺に塩を送るために固形の塩を作るようになります。海草に海水をかけて蒸発させてできた塩粒に、さらに海水をかけて、水漏れしない特殊な土器に入れて火をたいて作ります。「万葉集」に出てくる「藻塩焼く」です。

弥生時代の始めにこの塩作りをなぜか忘れてしまい、弥生の後期から古墳時代の始めに復活します。最近、瀬戸内の島で、観光客のために古代の塩作りを体験して味見してもらう、というのをやっていますが、こういうものを食べると、最近の私たちは、いかにまずい塩を使っているかと思います。

人が生活すると、そこに食べカスや壊れた道具のゴミ捨て場ができます。人が住むということはゴミ捨て場があるということとほとんど一緒で、そこを漁って、掘り出して調べてみれば、当時の人たちがどんなものを食べていたのか分かる、ということになります。しかし、日本の土は酸性度が強くて、生ゴミは酸化して腐ってしまうから、なかなか良い資料にめぐまれません。一昨年ほど前、鳥取県の青谷町で弥生時代後期の頭蓋骨や体の骨がたくさん出て、その三つの頭蓋骨に脳みそが残っていました。これは水が酸素の供給を遮断して、さらに粘土がパックしてくれて残ったものです。以下の話は、このような有機質の残る低湿地遺跡と貝塚からのデータが話の主になります。

私達がいま食べている魚は、たとえば太平洋側の真鯛と日本海の真鯛を比べると多少違います。また外国産とも微妙に形が違います。このように棲んでいるところによって違うこ



骨格どおりに揃えた貝塚出土の「フグ」の骨

とがあるので注意が必要ですが、基本的に縄文時代に獲った魚と同じですから、今の魚で標本を作って、出土したものと比較して種類や大きさなどを判定することができます。人間の骨でも今の人間の骨と比べると、身長はどれくらいということが分かります。写真のフグの骨も、やはり今のフグの骨格標本と見比べればいいわけです。

スズキを一匹買ってきて三枚におろし、身はお刺身にして食べる。骨付きの肉は汁にして、子どもたちには「食べたら骨は絶対捨てないで、お膳の真中のどんぶりに入れておけ」と言って、自分で標本を作っていました。こういうことも「楽しい、おいしい考古学」のひとつだと思います。

さて、縄文人は結構いいものを食べていました。今なら一万、二万円もする大きさの鯛やスズキ、アカニシの刺身（？）、青森県の三内丸山遺跡からはタコとイカ、シャコ、カニのハサミも出ています。日本人が今食べている物と、数千年前の縄文時代に食べられていた物が、ほとんど同じだということが分かります。フグの毒処理もちゃんと知っています。よく、誰か犠牲になって、処理方法を知ったとかいいますが、それほど縄文人は間抜けじゃありません。私たちが自然のことを知らないという意味では、縄文人と比べたらもうはるかに間抜けです。

富山県小矢部市の桜町遺跡の水作業場から長さ六センチくらいの生のコゴミが出たことがあります。出た時は緑々してきれいだったのですが、またたくまに酸化して黒くなってしまいました。赤漆塗りの器が出てきた時も、ものすごくきれいですが、やはり見る見るうちに色あせていって黒ずんでしまいます。

京都の松ヶ崎遺跡では、オニグルミ・サンショウ・トチノキ・エゴマ・オニバス・カラスザンショウ・イモ類、山芋のムカゴも出ています。山芋を掘るらしい道具も出ているので、縄文人も山芋を掘って食べていたということはまず間違いないでしょう。

アンパンの上に乗っている白いつぶつぶのエゴマは、中国では今もたくさん食べていますが、縄文人も栽培していたことは明らかです。その他、色々な物を栽培していたようですが、大切なのは、縄文人は「俺たちの生活の本体はこれだから、知ってるけど、まあこの程度にしておこう」という、「知っているけれども、採用しないという選択」が、しっかりしていたということが重要です。

下越の黒川村の分谷地A遺跡からニワトコの種がたくさん出てきています。青森市の三内丸山遺跡で、ニワトコとショウジョウバエの蛹（さなぎ）がまとまって出たのを見て、考古学者たちは呑兵衛ですから、これはハエが酒の絞り粕の匂いに寄ってきのだろうと考え、縄文人は酒を造って飲んでいた証拠だという説をたてました。乾燥させてから煮詰めて濾していくと、菌がついて発酵するという製法です。それを疑問に思っていたら、女優の竹下景子さんがニワトコシロップをくださった。体を温めるということで、ヨーロッパではニワトコシロップを呑むそうです。他に取っ手のついた黒漆塗りの洒落た片口容器の中に、クワ属の種子・タラの木・山葡萄・カタバミ・カラスザンショウ・タデ・ミヤマニガウリ・シ

ソ属・トチノミ・オニグルミなど、色々な物が入っていました。縄文人は多様な植物を利用していたんです。

御所野遺跡のある岩手県一戸町で、土地の人に昔からどんなものを食べていたか挙げてもらったら、植物性のものだけで一一五種もありました。このほかにキノコが三〇種ほど挙げられています。それらは縄文時代と変わってないのでしょう。

長岡市の岩野原遺跡で「パン状炭化物」という、捏ねて焼いて食べたらしいクッキーのようなものが出ました。東日本で同様なものがいくつか出土していますが、その中には焼け焦げたノビル・アサツキ・エゴマも入っていました。

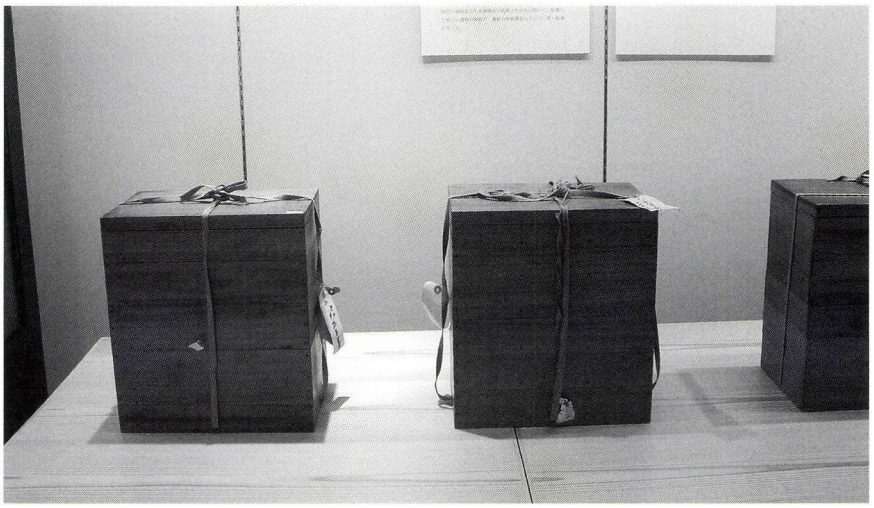
南米のインディオは、ジャガイモを食べるとき土をつけて食べます。その土は植物性プランクトンの死骸が土になった珪藻土で、ミネラルが豊富でやや甘く、これをジャガイモにつけて食べるわけです。北海道の南茅部町の縄文遺跡から珪藻土が出ていまして、私は、縄文人も土を食べたに違いないと思っています。昔、ビスケットが粉っぽかったのは、珪藻土を混ぜていたためです。北海道の戸井町には珪藻土が採れますが、アイヌ語で食べる土という「チェ・トイ」から地名が付いたものです。

以上のように、縄文や古代の遺跡が教えてくれる祖先の暮らしは、三〇年前まで、日本人がやって来たことと基本的に同じだということが分かります。経済成長のスピードが速かったため、忘れ去られてきたことが多いように思います。

＊

日本の歴史は、歴史を画一化しようとした結果、「どこでもいっしょだ」という幻想を持ってしまいました。じつは、その地域でその地に適った歴史を培ってきたわけで、一万年間、その地域にふさわしい生活を編み出してきたのだと思います。もう一度、「歴史には祖先の様々な生活が埋まっている」ということを踏まえて、地域を大事にしながら、この地域に適った生活を思い起こし、未来に伝えていきたいと思います。（本稿は、過日上越市埋文センターでの講演をもとにしたものです）

注／上越市埋文センター、県歴博、囲炉裏、森成コレクションの写真は編集部において撮影したものです。



「森成コレクション」桐箱に納められている

森成コレクションと森成麟造

明治一七年生まれ。第二高等中学校（東北大学医学部の前身）を卒業、東京の長与胃腸病院に勤務。勤務中、胃潰瘍で危篤状態にあった夏目漱石の主治医として治療し、その縁で後々まで親交を持つことになったのは有名。明治四四年、郷里高田で森成医院を開業。

彼は「東嶺」と号して俳句をたしなむ傍ら、考古学に熱意を傾け、収集品には必ず採取地を明記して保存整理し、貴重な考古資料（森成コレクション）となっている。また昭和二五年には上越郷土研究会が結成され、会長に就任。機関誌「頸城文化」を創刊している。

茶新田遺跡　上越市御殿山町にある縄文中期の遺跡。

プロフィール
一九四八年　上越市寺町生まれ
東北大学大学院修士課程終了
現職　奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部長
著書
『縄文物語　海辺の村から』（朝日百科別冊／朝日新聞社）
『貝塚と骨角器』（日本の美術№三五六／至文堂）
『やってみよう縄文人生活』（別冊課外授業ようこそ先輩／TKC中央出版）※母校の大手町小の子どもたちとNHKTVの「課外授業」を行った（編）
『縄文の生活誌』（日本の歴史01／講談社）

■読書びと



神谷美恵子 若きこころの旅

太田愛人著

河出書房新社刊
一八〇〇円

まだお会いしたことはないのだが、妙高池の平クリスチャン村に、元東京ＹＭＣＡ総主事の星野達雄氏と言う老篤学が住まいされている。

多くの著作の中に私家版にて九九年に出版した『群馬の里から』という佳品があり、内村鑑三が大正九年の日記に「沼田の星野家は我国稀に見る所の旧き基督教的家庭である」と記したその四代に亘る星野一族の篤い信仰の軌跡が、故郷の上州沼田を舞台に生き生きと語られている。

絹糸により横浜と結ばれていた上毛の地の、わが上越後とは対照的な精神文化の風土に、感ずるものが多い。（付け加えて、収録されている論文『植民地下朝鮮のＹＭＣＡ』は示唆に富む）

そして想い出す本に、『辺境の食卓』や『明治キリスト教の流域』（何れも中公文庫）などの〈食〉をキーワードに綴ったナチュラルヒストリーと、近代社会運動の裏面を見据え、地の塩としてのプロテスタント史を私達に手渡し続けている太田愛人の『上州安中有田屋―湯浅治郎とその時代』（小沢書店）という力作評伝がある。

太田はその作品で、新島襄、内村鑑三、柏木義円など上州キリスト者の活躍を支え、廃娼運動の先駆者として、また日韓交流や同志社経営、出版による軍縮・帝国主義批判に心血を注ぎながら、自身は一切の著述を残さず、商業人、一信徒としての生涯を勁く貫いた湯浅の像を描く。

今こそ神学と文学の呪縛を断ち切って、素直にこの宗教と向き合っていく事が大切なのだ。

太田愛人（おおたあいと）は一九二八年に盛岡市に生まれた。五六年に東京神学大学大学院を卒業。長野県大町の木崎湖畔と信濃町の伝道所での二十二年間に亘る活動の後、横浜市日本基督教団上星川教会で世紀末まで牧師を務め、その間月刊誌『辺境通信』を世に送った。信州の山々を踏破した野人は、語り続けてきた自然と共に簡素に暮らす悦びを頼りに、混迷の新世紀における生きがいへの答えを迫る。

本年二月に上梓された『神谷美恵子　若きこころの旅』は皇后美智子をはじめ多くの読者を持つこの女性の、少女時代からの様々な人と本との出会いの軌跡を辿った評伝である。

神谷が愛したサン＝テグジュペリの『人間の土地』、その中の「真の贅沢というのは、ただひとつしかない。それは人間関係の贅沢だ」という一節のそのままに、祖父と仰いだ新渡戸稲造、ミミと呼ばれ養女になりたいと思うまで愛された、あらえびす野村胡堂とその夫人ハナ、ハンセン病に目を開かせてくれた母方の叔父で上州のキリスト者として著名な金澤常雄、津田塾大学第二代学長の星野あい（達雄氏の大叔母で沼田の星野一族）等、十四人の先達とのこころの交流が、共感を込めた太田の眼差しを通して綴られている。

神谷美恵子（かみやみえこ）は一九一四年、後に戦後初代の文部大臣となる前田多門の長女として誕生、九歳から十二歳までを、政府代表として赴任した父の任地ジュネーブで暮らす。その地で国際連盟事務次長として活躍していた新渡戸稲造の薫陶を受けた。アメリカでの生活を経て津田塾で学び、初心を貫いて三十歳にして女子医専（東京女子医科大）を卒業する。精神科に転じ、五七年から病に倒れる七二年まで四国の長島愛生園でハンセン病患者のケアを行いながら珠玉の著作を多く残した。

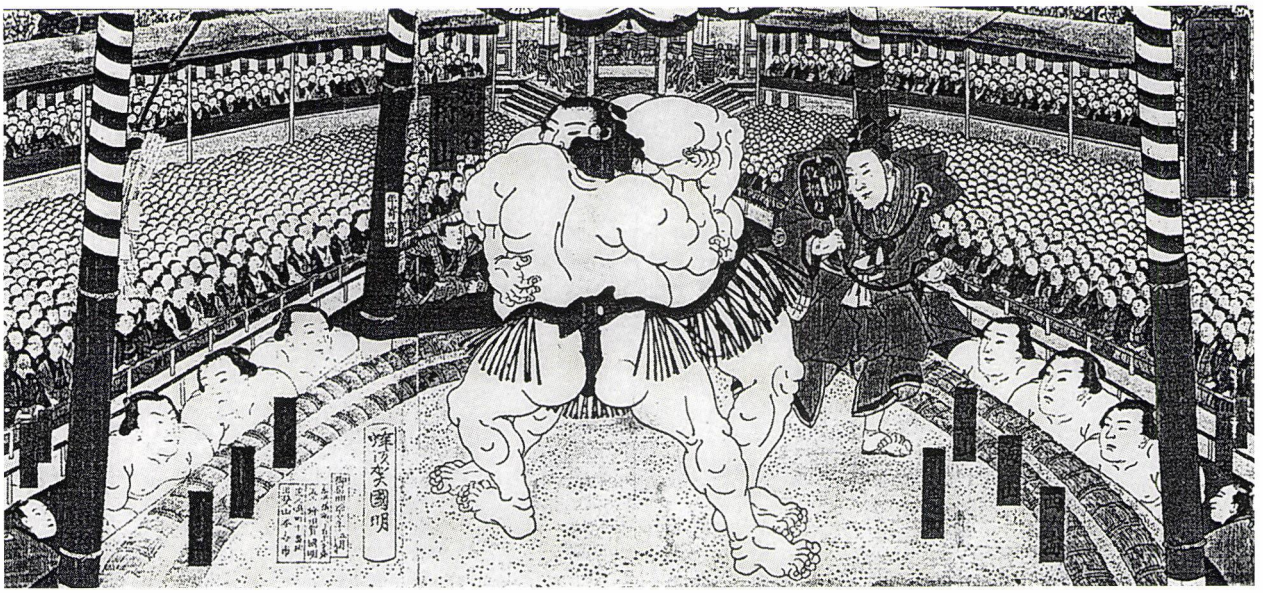
太田の言を借りて言えば〈医師にして西洋古典語学者、教授にして二児の母、精神科医師にしてハンセン病医師、ヴァージニア・ウルフの訳者にしてミッシェル・フーコーの訳者、『生きがいについて』の著者にして実践者という多面的な活動〉の素地が、この一冊の本に籠められている。

我が中井久夫をして「彼女にしかできないことが多すぎたのは一つの不幸であった」と述懐させた神谷の〈看護と献身〉。その神話の世界から言葉と音楽を愛し続けた一人の女を甦らせる、羊飼い太田愛人の見事な仕事振りであった。　（診）

ふりーすぺーす

今町が生んだ力士 越ノ海勇蔵

村山和夫 むらやまかずお



○謎を秘めるその生涯

越ノ海は、直江津今町が生んだ名力士で知られている。近年発刊された『大相撲人物伝』（ベースボールマガジン社　以下「人物伝」）は、越ノ海について次のように経歴と力士姿が紹介されている。

直江津出身、本名柴福松、宝暦から安永期にかけての強豪力士。初め武蔵川初衛門の弟子で、のちに玉垣額之助の門下に転じた。宝暦九年三月の江戸に「越州」頭書で東上段五枚に越ノ海福松が初見。「越後」「江戸」と頭書が変わり、明和四年三月のみ「仙台」となっている。同年五月の大坂で下の名を勇蔵と改めた。稲川（猪名川）、千田川、友綱（横綱）らとともに四天王と言われ、全盛期の雪見山、出水川と互角に戦い、釈ヶ嶽に勝ったこともある実力者であったが、不運にも三役の経験がなく、最高位は前頭筆頭に終わった。看板大関がはびこる当時、必ずしも番付が実力の順位を示すものではなかったための現象である。上方では晩年に「京」を冠し、江戸は安永九年十月を限りに、翌天明元年七月、京都で現役のまま死亡した。江戸一代の成績はよいが、引き分け、預かり、無勝負が多いのが目立つ。

ところで、『直江津町史』（以下「町史」）における越ノ海に関する記述を見ると、「人物伝」と次のような異同が見られ、謎の多い力士であることが知られる。

①出自及び氏名について―直江津出村出身

（一説に能登という）、名は舟木勇蔵、今町福永家に仕う

②力士として資質について―力量人にすぐれ、駆幹長大身の丈け五尺八寸（一説に駆幹倭少とも）

③入門について―福永十三郎、相撲とならんことを奨め資を給して、江戸、柏戸宗五郎の門に入らしむ

④番付の登場について―宝暦一〇年、東前頭一段目に入幕（一説に寛政七年入幕という）

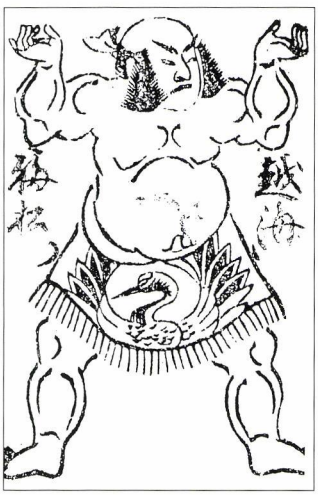
⑤活躍期について―寛政時代には東方大関に頸城出身の九紋龍あり前頭には越ノ海あり

⑥大名の抱えについて―越前宰相松平侯の御抱え力士となっていった。時恰も安永年間、今町、高田間に生魚販売権に関する訴訟問題があって旧主福永十三郎出府せるに逢い旧主福永十三郎並びに郷里今町の為め越前宰相を通じて裏面から助力して勝訴に帰せしむ

⑦死因について―師匠の為め四海波灘右衛門を破って、其の仇を復したが、灘右衛門の襲撃に逢い遂に傷死した

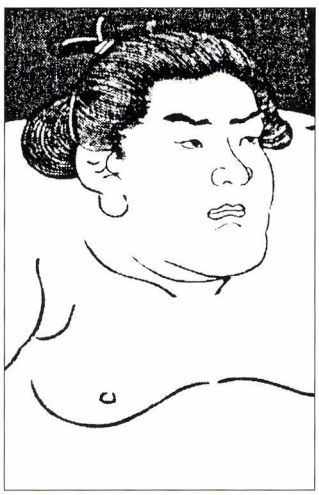
相撲の勝負には行司がどちらかに軍配を挙げなければならないが、物言いがついた場合には、審判役によって協議がなされ「ただ今の勝負、行司の軍配通り」あるいは「行司の軍配指し違い」と、判定が見直されるのが仕来りである。

「人物伝」と「町史」との記述において、履歴、業績および死因などについて相違点が見られる。新資料によって史実や伝承の再検討ができればよいと願っている。とりわけ、肴販売をめぐって今町と高田商人の争いとの関わりについてである。ここでは、同体と見なし再勝負とする。


越ノ海勇蔵（今町出身）


越ノ海勇蔵


越ノ海勇蔵（勇吉）


越ノ海福松

●大相撲力士「越ノ海」大集合

越ノ海勇蔵（一七九七～一八六一）

寛政九年（一七九七）、広島市西区草津に生まれる。本名、餅屋鶴之助、初め大坂の朝日山部屋に属し、若竹、朝日潟の名で土俵に上り、文化一一年、江戸に入り越ノ海勇蔵と改め、前頭二枚目を最高に一一年間土俵をつとめる。この間、阿波蜂須賀家に抱えられ、下の名を灘五郎と変える。天保二年、二段目に落ちて待乳山鶴五郎と改め、同年、江戸を去り大坂で雪見山鶴五郎と改め、同十年まで土俵に上った。文久元年（一八六一）没。

越ノ海勇蔵（勇吉）（一八二五～一八七八）

文政八年（一八二五）、福岡県糸島郡志摩町芥屋に生まれ、本名、吉村、初め大坂の湊部屋に入り、大戸崎井瀬吉、玄海灘右衛門などと名乗った。安政四年、江戸に上り玉垣部屋に入る。四股名、鳰嵐磯五郎を経て、部屋ゆかりの越ノ海勇蔵と改める。元治元年、入幕を果たし最高位前頭六枚目に進んだ。

慶応三年三月場所を最後にして、大坂に移って再度、土俵に上ったが明治二年には廃業し婿に入り、神戸において宿屋を営む。一一年（一八七八）没。

越ノ海福松（一八一四～一八五一）

文化一一年（一八一四）、唐津市東唐津に生

まれる。本名、山下。江戸の玉垣部屋に入門し、天保六年、満島嘉蔵の名で二段目に付け出され、次で大童子、峰五郎と変え、玉垣部屋の越ノ海を名乗ることが許され入幕を果たした。

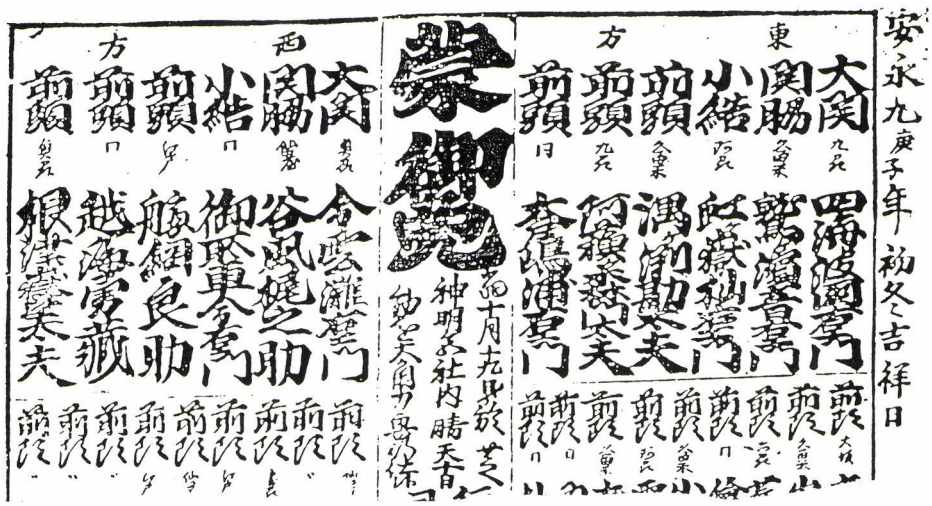
一二年、姫路藩のお抱えとなり書写ヶ嶽峰五郎と改めるが、抱えが解かれると越ノ海に復した。中堅力士として前頭三枚目を最高位として弘化三年まで幕内に在位した。嘉永四年（一八五一）没。

越ノ海東治郎（一八九七～一九七三）

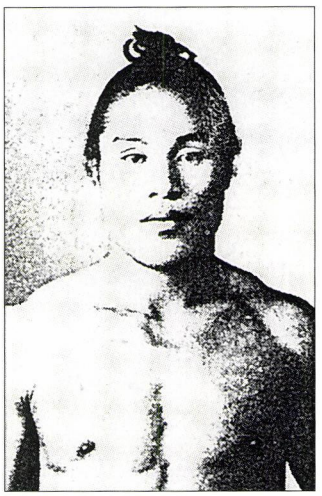
明治三〇年（一八九七）七月一日、糸魚川市上野山に生まれる。本名、加藤東治郎、後に渡辺姓となる。

大正一四年一月、若藤部屋に入り、四股名は初め頸城山とし、後に越ノ海と名乗った。入幕は、昭和七年で最高位は前頭六枚目に進んだ。身長は一七三センチ、体重九〇キロで小兵であったが、右四つからの上手投げを得意として大型力士を倒し、人気があった。一一年一月から年寄若藤との二枚鑑札となる。一二年一月場所を最終場所とし、年寄に専念し四六年六月、六五歳の定年までつとめ上げた。これより先、八年に沖ッ海がフグ中毒で死亡する事故があったが、一緒に食べていた越ノ海はフグの毒に当たらなかった。定年まで相撲界で過ごせたのも、この強運が幸いしたものと囁かれた。

昭和四八年（一九七三）一月二四日、六六歳で逝去。無事に年寄の定年を迎えた、わずか一年半後のことであった。



「越ノ海」が登場する最後の番付　安永９年10月場所　於 芝神明社


越ノ海東治郎

◐力士・越ノ海勇三再検討

越ノ海勇三の謎を改めて検討してみたい。入門期について「町史」では、宝暦一〇年、東前頭一枚目とあり、別表とほぼ一致するが、番付に付いては疑義が残る。入門は、福永十三郎が柏戸宗五郎の門に入らせると「町史」に見えているが、四股名「越ノ海」は「玉垣部屋」で引き継がれるものであり、玉垣額之助の下に入門したと見るべきであろう。

活躍期についても、一説に寛政七年入幕と、注記があるが、寛政七年（一七九五）では時代が下がり過ぎて合わない。寛政期、谷風梶之助、小野川喜三郎、雷電為右衛門および頸城出身の九紋龍、下越出身の鷲ケ濱が肩を並べ、大相撲史上、黄金期を迎えていたが、越ノ海は、土俵を共にすることはできなかった。活躍地は三郡および諸州と見えているが、別表の番付表では、明和四年五月の大坂場所でしか確認できない。

安永年間、今町と高田の間に生肴販売権をめぐって訴訟問題（いわゆる四十物出入）があり、福永十三郎が出府の折り、越前宰相松平家の抱え力士越ノ海は、越前宰相を通じて裏面から助力して勝訴に導いたといわれるが、番付の頭書は江戸であり、越前公のお抱えではなかったことが知られるが、出入りが許されていたことは考えられる。

なお、越ノ海の墓は、直江津の延壽寺（住吉町）にあるが、岩嶋裕氏（中央四）は、「墓石はみかげ石で福井藩主から贈られたものである」と、著書『新潟県　郷土史と仏教史』で福井藩との関わりを示唆している。

その死について、「人物伝」は、天明元年（一七八〇）七月、京都において現役死亡としているが、「町史」では、「師匠のため、四海波灘右衛門を破って、その仇を復したが、灘右衛門の襲撃に遭い遂に傷死した」と記されている。このことについて、雷電為右衛門を生んだ長野県東部町の相撲史研究家の田中邦文氏は「力士の現役死亡は、当人を惜しむためか、暗殺説、毒殺説を生み、それが遺恨説に発展したのだと思われる。当時、かなりの数の力士が現役死している」と見ている。当地においても、明治二二年、関西相撲が、高田寺町の金蔵寺（寺町二）境内で行われた際、前頭の「玉の海栄吉」が急病に罹って死亡し、市内の最賢寺（南本町三）に墓がある。

以上、越ノ海について若干の考察を試みてきたが、番付から、次のことが言える。

・初めは「越後越ノ海福松」と称し、越後出身であることを示していた。

・宝暦一一年以降は江戸頭書となり、江戸大相撲に身を置いた。明和四年三月の番付は、「仙台」となっている。（先の田中邦文氏は、誤って刻られたものであろうとしている）

・越ノ海は、当初から上位にあり、江戸相撲においてほとんど皆勤であり、心技体とも安定していた力士であったと思われる。

・死は、謀殺とは考えにくい。

本稿を記すにあたり、田中邦文氏（郷土史家・長野県東部町）から、越ノ海の番付表をはじめ、貴重な資料のご提供および懇切なご示唆をいただきました。ここに深謝いたします。

越ノ海の番付（西暦一七五九～一七八〇）

年代	番付	名前	場所
宝暦九年三月	東前頭五枚目付出	福松	深川八幡社
宝暦十年十月	西前頭四枚目	福松	芝神明社
宝暦十一年十月	西二段目二枚目	福松	浅草蔵前八幡社
宝暦十二年三月	西二段目筆頭	福松	深川八幡社
宝暦十三年四月	西前頭五枚目	福松	神田神明社
宝暦十三年十月	西前頭四枚目	福松	浅草蔵前八幡社
宝暦十四年三月	西前頭三枚目	福松	浅草蔵前八幡社
明和元年十月	西前頭四枚目	福杰	浅草蔵前八幡社
明和二年三月	西前頭五枚目	福松	芝神明社
明和二年十月	西前頭五枚目	福松	深川八幡社
明和三年三月	西前頭三枚目	福杰	芝神明社
明和三年十月	西前頭筆頭	福松	深川八幡社
明和四年三月	西前頭四枚目	福松	深川八幡社
明和四年五月	東前頭四枚目	勇蔵	《大阪相撲》
明和四年十月	西前頭三枚目	勇蔵	深川八幡社
明和五年三月	東前頭筆頭	勇蔵	本所回向院
明和六年四月	西前頭二枚目	勇蔵	深川八幡社
明和六年十月	西前頭筆頭	勇蔵	深川八幡
明和七年三月	（番付に登場せず）		深川八幡社
明和七年十一月	（番付に登場せず）	勇蔵	市谷長龍寺
明和八年三月	西前頭筆頭	勇蔵	深川三十三間堂
明和八年三月	西前頭筆頭	勇蔵	深川八幡宮
明和八年十月	西前頭筆頭	勇蔵	深川八幡宮
安永元年十一月	西前頭二枚目	勇蔵	本所回向院
安永二年三月	西前頭三枚目	勇蔵	深川八幡社
安永二年十月	西前頭三枚目	勇蔵	本所一ツ目八幡宮
安永三年四月	西前頭三枚目	勇蔵	深川八幡宮
安永三年十月	西前頭二枚目	勇蔵	深川八幡宮
安永四年三月	東前頭二枚目	勇蔵	深川八幡宮
安永四年十月	西前頭一枚目	勇蔵	深川八幡宮
安永五年正月	（番付に登場せず）		浅草蔵前八幡
安永五年十月	西前頭三枚目	勇蔵	深川八幡宮
安永六年四月	西前頭筆頭	勇蔵	深川八幡宮
安永六年十月	西前頭三枚目	勇蔵	深川御船蔵前八幡宮
安永七年三月	西前頭三枚目	勇蔵	深川八幡宮
安永七年十一月	西前頭一枚目	勇蔵	深川八幡宮
安永八年三月	西前頭二枚目	勇蔵	深川八幡宮
安永八年十月	西前頭三枚目	勇蔵	深川八幡宮
安永九年三月	西前頭三枚目	勇蔵	深川三十三間堂
安永九年三月	西前頭二枚目	勇蔵	芝神明社

（注）登録は、宝暦9年は「越州」、同10年は「越後」、明和4年3月は「仙台」、それ以外はすべて「江戸」となっている。

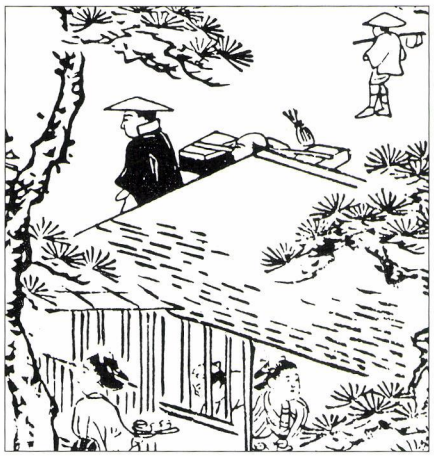
■参考資料
『直江津町史』昭和二九年　直江津町役場
『大相撲人物伝』平成一三年　ベースボールマガジン社
（越ノ海勇蔵・雷電伝記に組み入れらる）
村山和夫・「文芸たかだ」（一五六号）平成一三年

■プロフィール
上越市史編纂委員、同専門委員
著書『高田摘誌』平成一三年　北越出版


福永十三郎像（東雲町・徳泉寺蔵）


越ノ海勇蔵の墓（住吉町・延寿寺）

東海 東陸



新潟で「わっぱめし」を料理として最初に出したという料理屋の出店（でみせ）が、東京の我が家の近くにできたので、早速、友人と出かけた。

今から?十年前の思い出である。

あま海老（確か「なんばんえび」と品書きにあったような気がする）の刺身や鰤大根など、懐かしいものばかりで、「越の寒梅」を元祖幻の酒などとは知らず呑んだのも懐かしい記憶である。

ともあれ、次々と注文しては食べていくうち、ふと目に入った品書きが「のっぺ」、友人が、

「おー、のっぺだねか」

この一言で、のっぺを注文。ところが出てきたものを見て顔を見合わせた。わが上越後生（かみえちご）まれの二人が見たものは、大げさに言えば、「見たこともない」煮物である。

この友人、二人で初めて中華料理屋に入ったとき、ピータンという未知の食べ物を「この玉子、腐ってるねか」と、店員嬢を呼びつけてクレームをつけたくらいの人物である。店員を呼ぼうとして挙げた手をとっさに押さえて、その場は事なきを得たのは言うまでも無い。

最近、ふとしたことで、右のことを思い出し、いつものように『広辞苑』を見ると、第二版と五版では、葛を入れて「どろっ」が「とろみ」に、具材が油揚・大根・椎茸・人参に、里芋・蒟蒻・豆腐が追加されている。また。会席料理という表記が消えた。『日本大歳時記』（講談社）にも、冬の季語として、ほぼ同じことが書かれているが、面白いのは「津和野の郷土料理といわれるが新潟でも同じものが作られる」とあり、里芋が穫れる冬の食べ物とし、片栗粉を入れると書いている。しかし写真をみると、鮭のはら子が乗り、とても「とろみ」がついているとは思えない。まさに、二人が見た「煮物」である。

インターネットで検索すると、春日大社の「若宮おん祭り」に供される「のっぺい汁」に始まり、ほとんど全国に分布していて、「のっぺいそば（うどん）」が名物という土地や、一般にイメージする「のっぺ」とはとても思えないようなものもあるようだ。そのなかで興味深いのは、異口同音に「わが地方独特の郷土料理」と言っていることである。これを見ても、食文化など縁遠い若者二人が、おらが「のっぺ」では無い、と思っても無理はなかったのである。

この「わが地方」を新潟県内に限定して、〈とろみ〉一つとって比較しても、上（かみ）は葛、下（しも）は里芋でとろみを出す、というような単純なものではないようだ。あえて、とろみを出さないようにしている地域もあるし、〈里芋・葛〉という土地もある。「鮭のはら子」にしても、まず上越では入れないが、上教大の大悟法先生の調査（『地域から考える総合学習』）では、高田地区で鶏肉を入れるところもある。新潟県内で共通なのは「汁」ではなく「のっぺ」くらいである。

作り方ではないが、上越地方に「法事」の行事食としている地域が多いのは面白い。

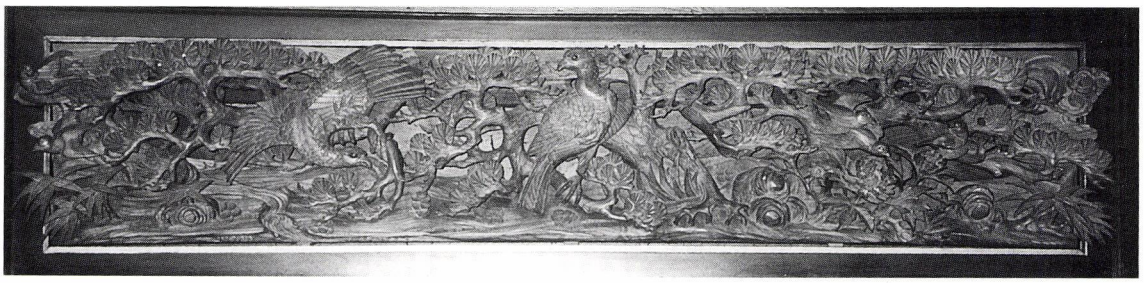
ちなみに、鬼平こと長谷川平蔵が芝神明前の料理屋、弁多津で、熱いのっぺい汁を「うまいな」

と、食べたのは、醤油仕立ての葛でとろみをつけたものである。

（濃）

●長野県鬼無里村

鬼無里村歴史民俗資料館 他



水芭蕉の群生地で有名な長野県鬼無里村の国道四〇六号をはさんで、道の駅の向かい側に鬼無里村歴史民俗資料館（山国文化伝承館・山村文化伝習館と三館併設）がある。

この資料館に、見事な彫刻が施された祭り屋台四基と神楽といわれる神社の形をした山車が展示されている。

屋台の彫刻師・宮大工の名を北村喜代松といい、天保四年、越後市振村（現青海町）の宮大工建部家に生まれ、若くして鬼無里の諏訪神社・鬼無里神社・賀茂神社神楽などの製作に携わり、その技を買われていた。文久年間、長野の北村ふさの婿になり北村姓となるが、三代目建部正信も襲名し、後、故郷周辺の仕事が増え、市振へ戻ることになる。

長男直次郎も幼くして彫刻師としての才能を発揮し、父子で寺社の彫刻を数多く手がけ、上越地方にも見事な作品を残している。直次郎は後に「四海」と名乗り、パリに留学して日本の大理石彫刻の世界を切り開き、帝展の審査員などを歴任した人である。四海の甥で養子となった広吉（五代目建部正信）は、祖父喜代松、養父四海に彫刻を学び、北村正信として二二歳で文展に入選、三三歳の若さで帝展の審査員となり、後に青海町名誉町民に推挙されている。

この三代にわたる彫刻師の作品が、山村文化伝習館側の小ぢんまりとした一室に「鬼無里の宝」として展示されている。また隣の部屋には、美術愛好家で喜代松の孫の長谷鉄男氏から寄贈された、近代日本を代表する作家の彫刻作品が、さりげなく展示されている。

彼らを顕彰する熱き思いの拠って来たるところを、押し付けがましさの無い、上品な説明をしてくださるシルバーボランティア（違っていたら失礼）とおぼしき方の話しからは聞き取ることはできなかったが、機会があったら一度、観覧をお勧めしたい。

年末年始以外、無休。



写真上・下
北村四海作欄間　料亭宇喜世（上越市仲町）
宇喜世のご主人は「四海先生」と呼び、大切に守っておられる。

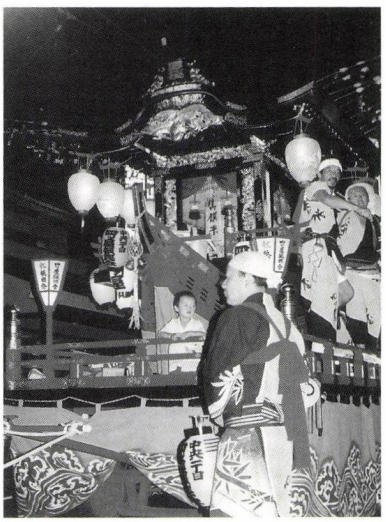
屋台まち

「直江津」とはなにか？
現在、祇園祭に屋台を出す町名の元になったのは、昭和27年の町内統合にあります。後に、祇園祭の神輿が巡幸しない町内も屋台を出すようになり、今のような19町になりました。祇園祭に屋台を出さなければ「直江津」じゃないのか？という反論を覚悟で、屋台を通して町内を訪ねることによって「直江津」が読み取れるのではないか、という大胆な仮説（？）のもとに取材してみました。（取材・江塚）

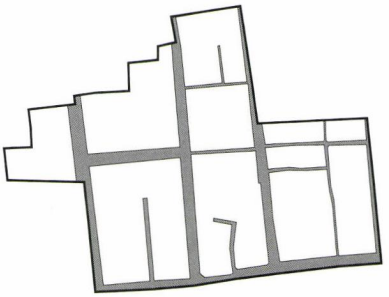
四ツ屋（よつや）

直江津が今町と呼ばれていた江戸時代は、西は福永町、南は住吉町までが直江津の町域で、四ツ屋があるあたりは田んぼや湿地帯だったと言われています。この「四ツ屋」という町名は本町の辺りから南を見ると「四つの屋根が見えた」ことに拠ります。明治に入ってから成立した町なので「（四ツ屋には）お宮も川も公園もない」と言われますが、かつては直江津駅も役場も警察署も四ツ屋区内にあり、近世から近代に変わる町の中心的な場所でした。

四ツ屋の現在の屋台は、老朽化のため、3代目として平成10年に新造されました。（トーア仏壇製作。近年は屋台を作れる船大工がいなくなり、仏壇屋がつくるようになった）2代目の屋台は、15年程前に浜町より譲り受けたものです。3代目の屋台新造にあたり、舟の側面についていた「組子」が良くできたものだったので、3代目の屋台に引き継がれました。ちなみに、1代目の屋台は有間川へ譲られたとのこと。



四ツ屋の屋台







上は明治42年に建てられた直江津警察署
左は昭和30年代の四ツ屋の風景

御幸町
みゆきちょう

●まちのめじるし●





昭和天皇行幸記念碑



御幸町の屋台



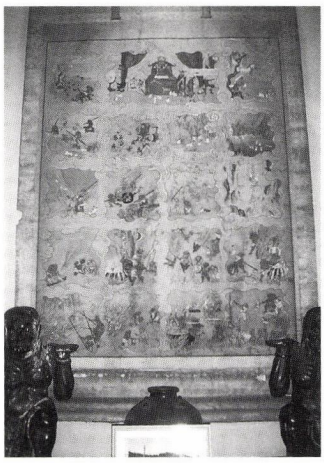
NTT 鉄塔
まちのシンボルというにはあまりに色気がありませんが、どこからでも目に入るマイクロウェーブの中継基地。

町名は昭和22年に昭和天皇がご巡行された際、直江津町民の歓迎を受けられた、直江津中学校のある周辺を記念して「御幸ケ丘」（直中の前に命名碑がある）と命名したのが、町名の由来です。御幸町は町域が広く、東は真行寺のあたり、西は五智２丁目の一部を含みます。

現在、町内のほとんどは宅地および学校や社会教育館などの公共施設ですが、直江津中学の東側一帯はかつて砂山と呼ばれる砂丘地帯でした。また、直江津高校の辺りは「ひばりヶ丘」と呼ばれ、砂丘の上にハマグミやハマナスなどが生えた、草原のような感じだったと言われています。

現在でも直江津の西側はなだらかに傾斜していて、砂山があったことが分かりますが、直中の前は、かつて 20 ～ 30 メートル程ある砂山で、そこには山王神社があるため、通称「さんのんさん」といわれ、男山、女山という緩急二つの斜面があり、冬は子供たちの格好のスキー場でした。

御幸町の屋台は戦後間もなく、諸般の事情から祭に出ることができませんでしたが、昭和 50 年より屋台の巡行を再開しました。その後、屋台が老朽化し、昭和 61 年に新造しましたが、直江津の屋台らしくないという理由で昨年、平成 14 年に新造（吉運堂製作）しました。



地獄絵図

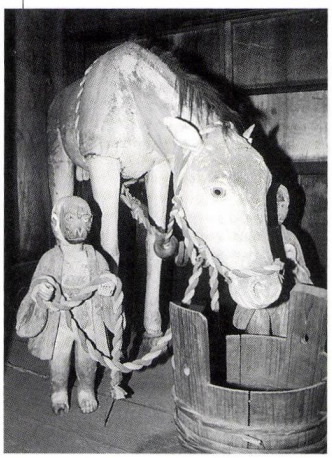
泉蔵院
泉蔵院の歴史は中世に遡りますが、本堂は享保７年のものです。平成 14 年に大規模な改修を行っています。大正10年の改修の際は、記念として閻魔堂及び仁王門がつくられました。現在は閻魔堂はありませんが、中に安置されていた閻魔様は、境内入り口脇の地蔵堂に安置されています。

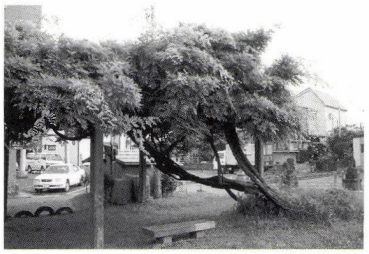
八幡
やはた



府中八幡宮内の池

現在は象の形は分かりませんが、象の背に乗せた鞍を模した石が残り、昔はこの石の上で洗い物をしていたといいます。

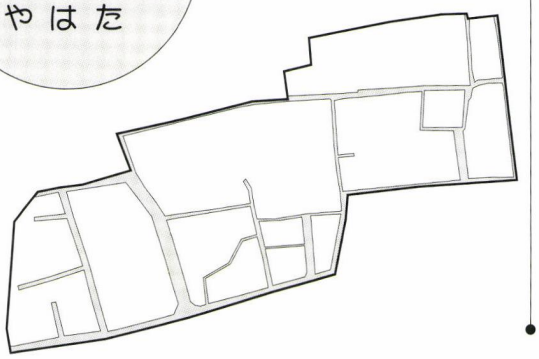




上　藤棚

100年を超える藤。池の西側にもっと立派な藤がありましたが切られてしまいました。

左　高田城主松平忠輝寄進の白馬



八幡の屋台



府中八幡宮

越後守護上杉氏や守護代長尾氏（後の上杉氏）をはじめ、江戸時代に入ってからも、歴代の高田城城主から深く崇敬されていました。明治に入り、城主の庇護を失ってからは、境内は町の人たちによって整備されています。

現在ではその形は失われていますが、境内西側にある池はもともと象の輪郭をし、池の水は北側にある砂丘から湧き出ています。かつては象の尻尾にあたる部分から池の水が境内を廻る濠に流れ出ていました。

その濠も埋められてしまいましたが、東側の参道から境内に渡る橋がその名残です。この東側の参道には鳥居や灯篭、松並木がありましたが、現在は市道として整備され、思いがけない道の広さだけが、かつて参道だったことを物語っています。

境内裏の砂丘には、まちが一望できる巨木や藤蔓が繁茂し、子どもたちの遊び場になっていました。

町名は町内にある府中八幡宮に拠りますが、明治頃までは町内には6軒の家しかなかったといいます。

八幡には屋台がなかったため、祭になると町内の子どもたちが他の町内の屋台に「くっついて」行ってしまい、しょっちゅう迷子になる子どもがいたといいます。屋台は、荒川町（旧川端区）のものを譲り受け、八幡にとって初代の屋台になりました。その屋台も老朽化が進み、18年程前に2代目の屋台が新造されました。新造されたのは上ものだけで、台車は1代目のものを使っています。またこの時は、舟がついてなく、この6年後に舟が付けられました。

新造する際、町内の振興部（青年会）が中心になって、バザーや町内会館のペンキ塗りなどをして、資金（各世帯に割り当てられるのが一般的だが）の工面をしています。

春日新田

かすがしんでん

祇園祭

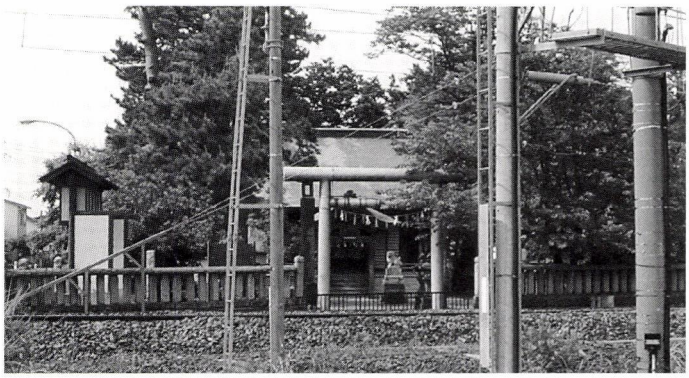
8／20～

城が春日山から福島、高田と変遷するに従って、それぞれの地に春日山城鎮守社である春日神社が分霊されました。高田城築城の際、福島城下の春日神社および春日町も高田へ移されましたが、その後、この地に宿場町が必要になって再び町が形成され、この時から町名を「春日新田」というようになりました。現在のような町並みが形成されたのは関川に橋が架けられ、港も関川東岸に移されていった明治以降のことです。

春日神社の秋祭りは福島城築城の頃から行われていて、神輿巡幸もこの頃から行われていますが、祇園祭として、屋台の巡行がいつから行われているのかは定かではありません。

春日新田にはかつて、春日新田の上町、中町、下町と川原町の上町、中町、下町の計6台の屋台がありましたが、現在では、春日新田の上町、旭、宮ノ前、佐内の計4台です。

「旭」は旧下町のことで、「下」という字を嫌って、町の東側にあることから、旭に変えられました。川原町は関川の河川改修により、その大半を失い、現在は50世帯あまりしか残っていません。宮ノ前屋台はもともと川原町にあった屋台で、これを川原町50世帯が春日新田の旧中町と一緒に運営しています。

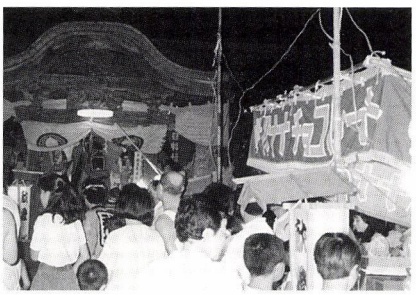


春日神社

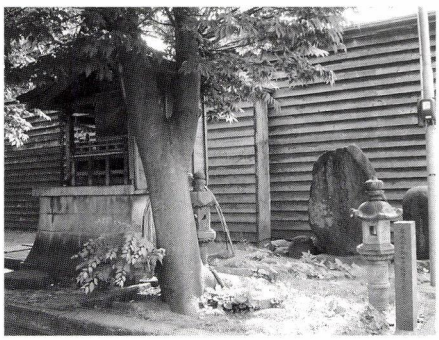
参道は北陸線の線路によって分断されています。かつて、ここに北越鉄道の春日新田駅がありました。





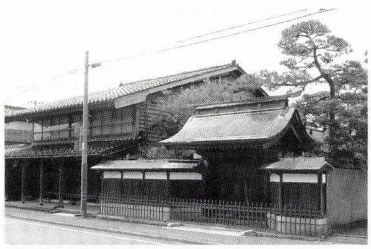


昭和60年代撮影



上　馬市跡

柏崎、栃尾と合わせて越後三大馬市と言われました。最盛期は1年に千頭を越す馬の取引があり、昭和18年ころまで続いていました。



左　旧庄屋

宿場町の名残。立派な屋敷門が特徴。

目見る（みるめ）

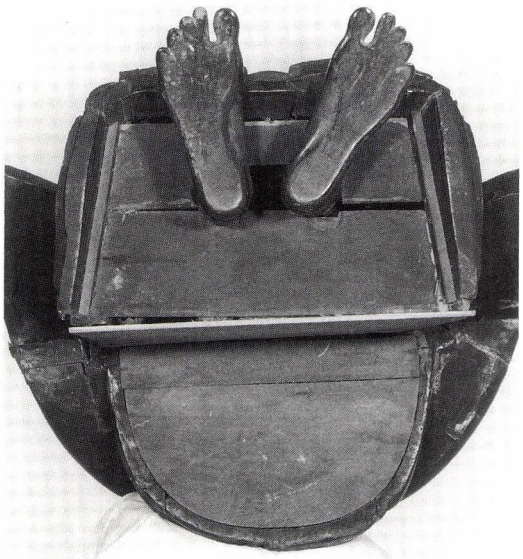
木造一鎮倚像（もくぞういっちんいぞう）

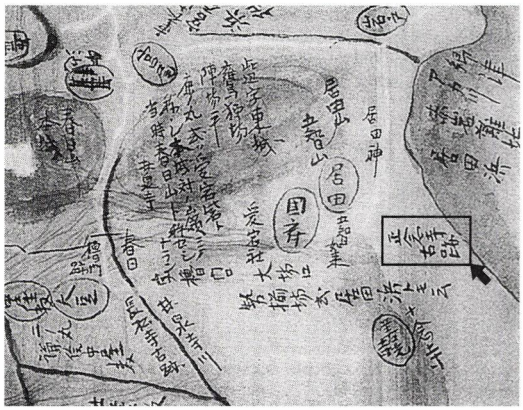
寺町二丁目の称念寺に「一鎮さん」というお坊さんの肖像彫刻が伝来しています。一鎮さんは、妻有庄（現在の十日町市）に生まれ、一遍上人が開いた「時宗」六代目の「遊行上人」、つまり宗派の最高位に任ぜられた人です。嘉暦二年（一三二七）には、越後国府（現在の直江津）に応称寺（後の称念寺）を開き、文和四年（一三五五）に時宗総本山の清浄光寺（遊行寺・神奈川県藤沢市）で亡くなっています。

本像は、ヒノキ材を寄せて作られた等身像で、椅子に腰掛け、胸前で合掌する珍しい姿勢をとります。目には水晶を入れる玉眼が用いられ、写真でもわかるとおり、まるで生きているように表現されています。このような写実性豊かな頭部や、起伏を少なくした衣文の表現から運慶の技法を継承した、慶派仏師によって京都七条仏所で制作されたと考えられています。

さて、「時宗」という宗派はあまり聞き慣れないと思いますが、いわゆる鎌倉新仏教の一派で、その特徴として「遊行」「賦算」「踊り念仏」があげられます。一遍は、全国各地を巡礼しながら（「遊行」）、南無阿弥陀仏の名号を刷った念仏札を配り（「賦算」）、あるいは「踊り念仏」によって民衆に布教を行いました。国宝「一遍聖絵」（清浄光寺蔵）等にその様子が生き生きと描かれています。もともと、寺院を構えない宗派でしたから現在においても他宗派と比べてその数はそれほど多くはありません。事実、称念寺は上越地方唯一の時宗寺院です。しかし、中世の越後においては、たいへん大きな影響力を持っていました。称念寺に伝わる上杉謙信の安堵状には、先祖「代々」称念寺を保護してきたので、謙信自身もさらに厚く保護するという約束がしたためられているのです。謙信の先祖の長尾景恒（?～一三六七　越後長尾氏祖・越後守護代・法名「春阿弥陀仏」）や、景恒の父景為（法名「修阿弥」）などは、法名に時宗信者であることを示す阿弥号を用いているので、長尾家と時宗との古くからの結びつきが伺えます。

ところで、これまで一鎮像として紹介してきましたが、一鎮像と確定したのは、実は最近のことなのです。称念寺でも昔から「一鎮さん」と伝えられてきたものの、確たる証拠はありませんでした。新潟県文化財の指定を受けた翌年（平成六年）に、像の傷みが目立ってきたことから文化財修理が行われました。すると、像内から文字が記された木の板が発見されたのです。板の両面には次のように書かれていました。「作　薗阿弥陀仏　入阿弥陀仏」（表）、「遊行第六春秋七十七　南無阿弥陀仏　文和三年甲午三月廿七日」（裏）。この文字の発見により、本像が遊行第六代一鎮さんであることが確定したばかりでなく、文和三年（一三五四）、つまり一鎮さんが亡くなる前年に作られた七七歳の時の寿像（生前に制作する像）であったことも判明したのです。また、本像の制作に携わったと考えられる「薗阿弥陀仏」「入阿弥陀仏」の二人の名前も確認され、彫刻的な価値





「頸城郡誌稿」 附図
高田築城に伴い寺町に移る以前、称念寺は五智国分寺の隣にあったといわれ、上図に見える「正(称)念寺古跡」と推定されている。



だけでなく資料的な価値にも注目されています。

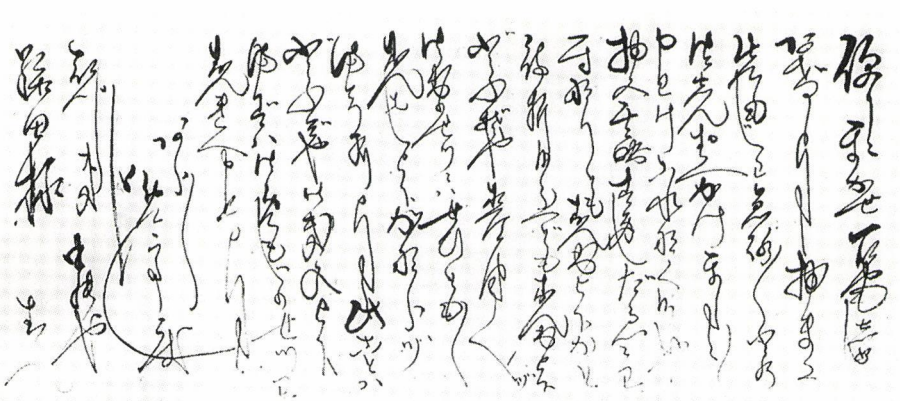
本像の特徴で興味深いのは、足の親指と人差し指の間にすきまが作られ、草鞋を履かせるような造作になっている点です。他の肖像彫刻をみてもあまり類例がありません。この表現は、一鎮さんが全国を巡り歩き布教した遊行上人であることを象徴しているようにも思えますが、すでに遊行を終えて隠居し、死を目前にした七七歳の一鎮さんになぜあえて草履を履かせたのでしょうか。本像の制作は京都、一鎮さんは藤沢で臨終、本像の伝来は越後……想像をたくましくすると、一鎮さんが草履を履いて最後に向いたかったのは故郷越後だったのかも知れません。

(編集部)

■国指定重要文化財
種　別　彫刻
指　定　平成十一年六月七日
所有者　称念寺
像　高　一二〇・八cm

投稿

直江津花街からの文（ふみ）
―明治十七年前後―



明治四四年の「高田日報」付録の「高田・直江津・新井電話加入番号」を見ると、直江津で一三件の貸し座敷が掲載されている（貸し座敷の実数かどうかは別）。

その中の「中野樓」とおぼしき一軒、「中のや　はん」から出された手紙（以下「文」）が、筆者の手元に四七通ある。差出し年月日は、電話が敷設される二〇数年前の明治一七年前後のものである。

文は、筆者の家人の実家（上越市近郊の農村地帯）で、書物類の整理中に一まとめにして出てきたものである。

日付のあるものは「明治十七年（一八八四）十二月三十日」の一通だけで、他は「癸未十二月二十六日（明治一六年）」と「甲申二月八日」（明治一七）と記されているだけである。

宛名は、

恋しき藤田様
恋しきふじ様
兄様藤田様
御兄様
恋しきおん兄様

などである。方や差出人は、

半
はん
中のやはん
名山はん

である。

この他「はん」が別人に出した文もある。内容から、心変わりでひと悶着あったものであろうかとも思われる。

便りにまかせ一筆しめし
あげ参らせ候　扨また
先もじわ　ゑろゑろ（いろいろ）との
御しんぱへかけ　ま事ニ　ま事ニ
申しわけこれなく候や
さて又　其の咄すみしだゑ（い）ニわ
一寸なりともおん出下さるかと
待折り候えども　おん出下されヅ
どふぞや直江津へ
御出でのせツニハ　ぜひともぜひ
とも
御こし下され　かならヅ
まち折り参らせ候　此のことハ
どふぞや御きき入れ下され
まずハ御めもじのせつわ
おんれへ申上参らせ候
あらあら
めで度
かしく
恋しき　中のや
藤　様　はん

文の書き口は、いわゆる直江津言葉の浜言葉そのままである。筆者の祖母は、直江津や高田へ天秤棒を担ぎ、鰯売り、薯売りに出ていた浜育ちであるが、その語り口と同じで、思わず笑ってしまった。

それはさておき、女文字のなかなかの達筆で、店の主人の代筆かとも思ったが、別の文を読むと直筆のようでもある。

この二人は、後に破局を迎えることになるが、もう一通、紹介してみよう。

ひさびさ　おんこし下され
づから　よふびん（鮭便）ニテ
一寸一筆しめし上げ参らせ候
扨とやせんじつわ
ま事ニ　ま事ニ　おまい様の
お親切　ま事ニ　ま事ニ
ありがたく存じ参らせ候
さて又　直江津い　おん
こしのせつハ　ぜひとも
御こし下され　ぜひとも
おはなし申し上たき事
海山ござ候から　ぜひとも
おより下され　しといに（ひとえ）　しといに
おんねがい上参らせ候
さて又　此てがみ
とどきしだいに　ごへんじ下され
どふぞや　おねがゑ上参らせ候
まだも　かきたき事ハ
山々ござ候らいども　ふての
さきかなしさよへ
あらあら　めて度
かしく
恋しき　中のや内
藤　様　はん
こかるる　より
へんじまつ

この文を大切に保管していた人物と、宛名の人物とは別人と思われる。この文を何らかの事情で担保にしていたのではないかと思われる様子があるからである。

タイトルを「直江津花街」としたが、『直江津町史』『高田市史』にも当時の花街の様子は、あまり書かれていない。

小池昇（大潟町下小舟津浜）

読者から

「ミニ特集」を見ていて、高田は、雁木と古い木造の家ばかりというイメージだったが、思いがけない発見があった。雁木ばかりに目を向けていないで、このような近代洋風建築にも注意を向けないと、高田市役所などのように消滅してしまうのではないか。（高田出身者）

＊

特集の「海の恵み」は、「誠に示唆に富む」と言ってしまえば、それまでですが、仲町の面白さを再認識させられました。明治の商業地図をもっと見たい。（仲町呑人）

投稿募集・内容の問合せ

投稿をお待ちしています。企画、執筆者への感想・意見・反論・身近な随想など、気軽にお寄せください。

フリースペースは、研究論文・提言・意見発表・創作発表の場です。テーマは自由ですが掲載について、多少の審査を行いますことをご了承ください。掲載文には僅かですがお礼をさし上げます。

投稿には、お名前・年齢・住所・電話番号を明記してください。フリースペース以外は匿名も可能ですが、その場合も氏名・住所をお書きください。

あて先

〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
☎〇二五（五四三）九七一五
FAX〇二五（五四三）二〇二五
北越出版内「直江の津」編集部
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

編集室から

弥生時代が五百年遡った。つまり、稲作が五百年も早く始まっていたというニュースが、最近の新聞の一面トップを飾ったが、「稲作伝播」という学術研究の世界では、大変な事件かもしれないが、あまりピンとこない。

なんと言っても、「はい、今日から弥生時代、お米のご飯を食べ始めました」式の歴史を教えられ、東大構内にある「弥生式土器発掘の地」という石碑を眺めて「ああ、ここで弥生時代が始まって、稲作りが始まったのか」と、感心するような筆者にとって、縄文とか弥生などという時代は、なんとも、よく見えない世界であった。

しかし、三内丸山遺跡の発掘成果を知ることで、「貧しくて原始的な世界」が、じつは豊かで、もしかしたら、我々の今の生活の原点、あるいはそのものではないか、という気がしていた。

今回、岡村氏の「たのしいおいしい考古学」は、そのことを裏付けてくれるものであった。今、我々が学ぶべきは「縄文人の節度」かも知れない。

■バックナンバー■

2001年3月　第1号　春号
年間特集　直江津を掘る
1 福永家文書から幕末明治の直江津の町並みを復元する　浅倉有子
2 掘ったら何が見えるか直江津　―中世都市・越後府中・直江の津―　小島幸雄

2001年6月　2号　夏号
年間特集　直江津を掘る
3 湊町から臨海工業都市へ　―直江津の産業史―　赤羽孝之
4 人々のくらしに息づく「祇園祭」　―囃子の伝承を通しての一考察　近藤美保子

2001年6月　3号　秋号
年間特集　直江津を掘る
5 フォッサ・マグナを境にした東西日本文化と南北の国土軸　市川健夫

2001年12月　4号　冬号
年間特集　直江津を掘る
6 古老が語った直江津の昔

2002年3月　5号　春号
特集　イントル、ナショナル、ヲイル、コムパニー　エドウィン・ダン

2002年6月　6号　夏号
特集　1　米山をめぐる民俗文化　渡邉三四一
　　2　報道のなかの祇園祭

2002年9月　7号　秋号
特集　1　直江津五智遊覧の旅
　　2　直江津の再生　江塚友之
講演　「地球」という館　渡邉　隆

2002年12月　8号　冬号
特集　1　西横山小正月行事
　　2　直江津・五智十二景
ミニ特集　この秋直江津のまちでやったこと
知の楽しみ　健康老化は人類の夢？　鍋島陽一
フリースペース　直江津の音楽文化―その1　中井ソノ先生の思い出　箕輪響

2003年3月　9号　春号
特集　「海の恵み」―高田のまちに見える海の印象―
ミニ特集　高田のまちの近代洋風建物
知の楽しみ　日本一のカラスのまち　中村雅彦
フリースペース　直江津の音楽文化―その2　海の入り日・上越市民吹奏楽団　箕輪響
見る目　直江津ゆかりの兄弟画家
わたしの直江津　なぜか、直江津　森子朗
読書びと『タマリンドの木』池澤夏樹著

第3巻3号（秋号）　9月20日　発行予定
年間定期購読（4冊1920円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

■「直江の津」が購入できる所　なおえつ茶屋（バックナンバー取り扱い）／柿村書店／エルマールブックセンター／春陽館／ラ・ソネ菓寮

季刊「直江の津」　第三巻二号　通巻十号
発行日／平成十五年六月二十日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市中央二－一－八
直振興業内
☎〇二五（五四五）〇二〇二
発行者／なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／（有）北越出版
責任者　佐藤和夫
内容などの問合せ先
北越出版
〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊

直江の津



発行／平成十五年六月二十日■発行者／なおえつ信金倶楽部■発行所／直江津経済文化研究会■制作協力／(有)北越出版■表紙構成／小谷充

頒布価格／三〇〇円(送料一八〇円)